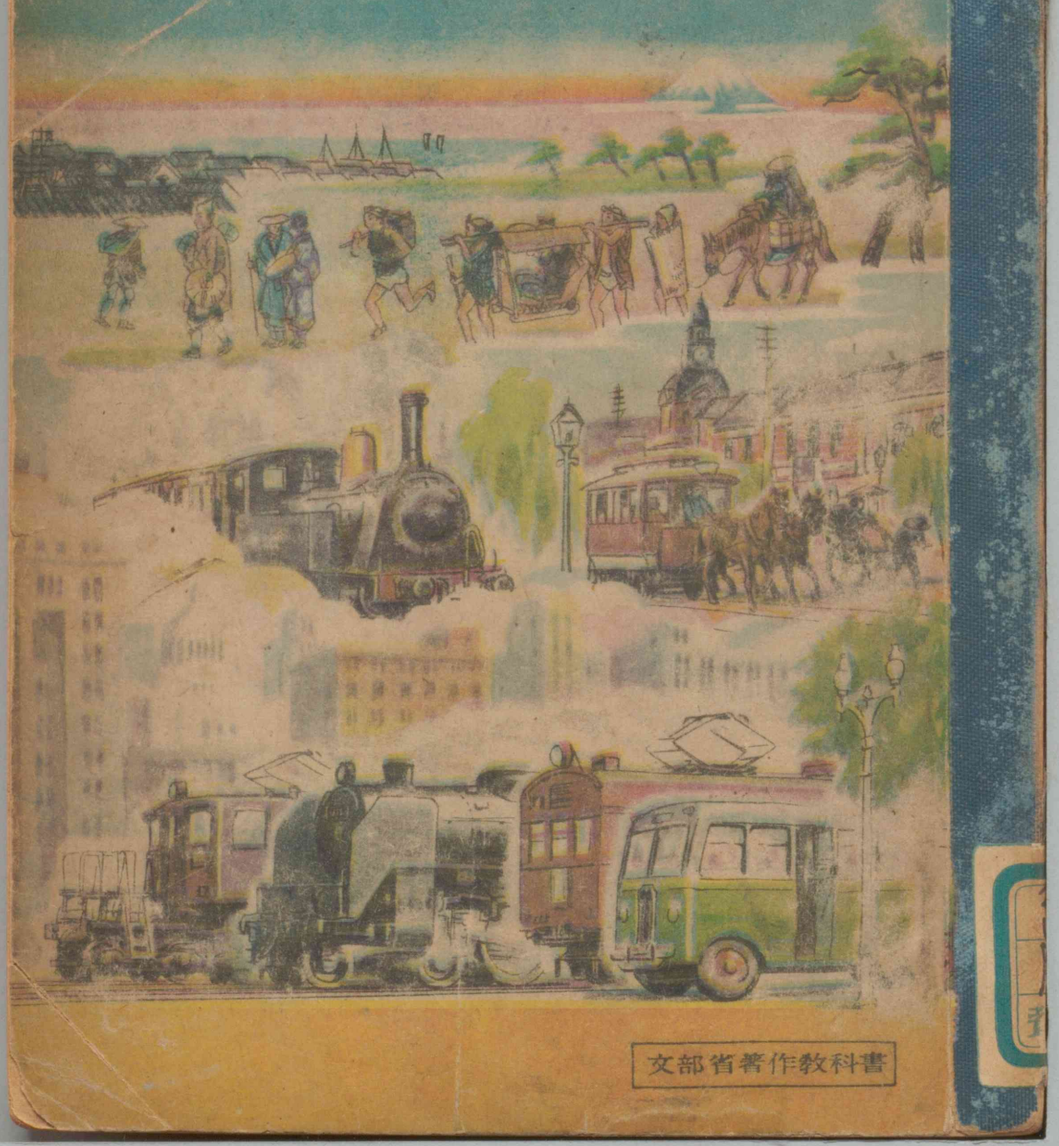
日本のむかしと今



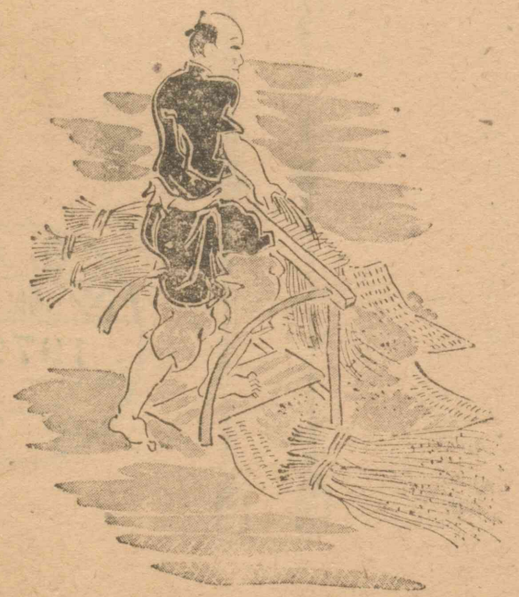
文部省著作教科書

60003

教科書文庫

6
300
34-1949
20000
19796

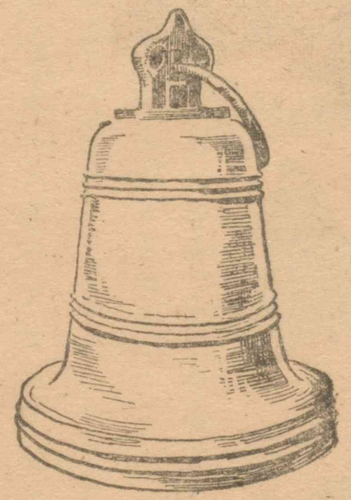
日本のむかしと今



資料室
375.9
M014

三、人々は、むかし、どんなふうにしてゆきをしたり、もの
のごとをしらせあったりしたか……五五
むかしの旅……五五
道のおこり……六二
むかしののりもの……六六
水の上の交通……七〇
むかしは、手紙をどういうふうにしてはこんだか……八一
もじは、どのようにしてできたか……八七
かんじとかな……九二
のろし・たいこ・はた……九五
四、どんなふうにして、今のようにべんりな世の中になってきたか……九八
外國とのゆきき……九八
新しい政治……一〇六

新しい生活……一一一
大きな工場……一二〇
農業のうつりかわり……一三一
新しい学校……一三九
五、私たちの村は、むかしとくらべてどんなふうにかわってきたか……一五〇
教師のかたがたへ……一七二



廣島大學圖書之印

一、だれが世の中を今のようにべんりにしたか

べんりな世の中

「おじいさんが、まだみんなのように、小さいこどもだったころには、こんなあかるい電とうなどというものは、どこをさがしてもなかったものだ。あかりといえば、今ていの電のときに使う、あのくらいランプしかなかった。まいあさ、学校にいくまえに、おとうさんにいいつけられて、ふうふういきをふきかけながら、ラン、

ブのほやをみがいたのをおぼえているよ。」

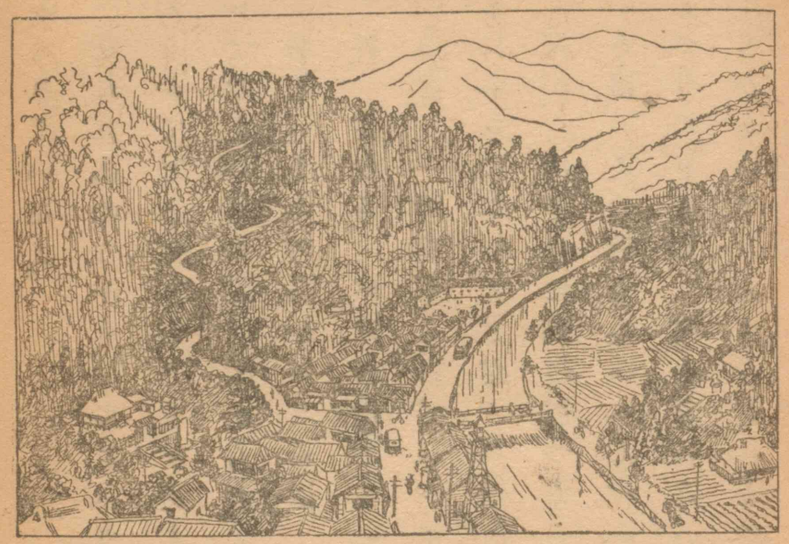
夕はんがすんで、みんながお茶をのみはじめると、おじいさんは、いつものように、にこにこしながら、むかしばなしをはじめました。廣くんもみちこさんも、おじいさんのりょうわきにすわって、たのしそうにお話をきいています。

おとうさんやおかあさんも、いそがしかったいちにちのしごとがおわって、ほっとひといきつかれたところです。みんながあつまって、ゆかいに話しあう夕ごはんのあとは、ほんとうにたのしい時間です。

へやのかたすみのラジオからは、きもちのよい夜の音樂がきこえています。

「なにかの用で、山のふもとにあるおじろの町へでかけていくのも、まったく大しごとだった。朝早く、いちばんどりがなくとすぐおきだして、いちにちぶんのべんとうをもち、ふたり三人つれだって、でかけていったものだ。

なにしろ、ほら、家のまえにみえるあのとうげをこして、四里の山道をてくてく歩き、町であちらこちらと用事をたして、また歩いて帰ってくると、家につくころには、もうすっかり日



がくれていたよ。

それに山のなかも、おじいさんのおとうさんのころには、森のなかでときどきおさるが遊んでいるのをみかけたというくらいさびしいものだったからね。

おじいさんのわかいころは、今の縣道も、まだできていなかった。だから、バスの通っているはずもない。今では、バスにのると、一時間ぐらいでいってしまうが、そのころは、ほんとうにいちにちしごとだったのだ。

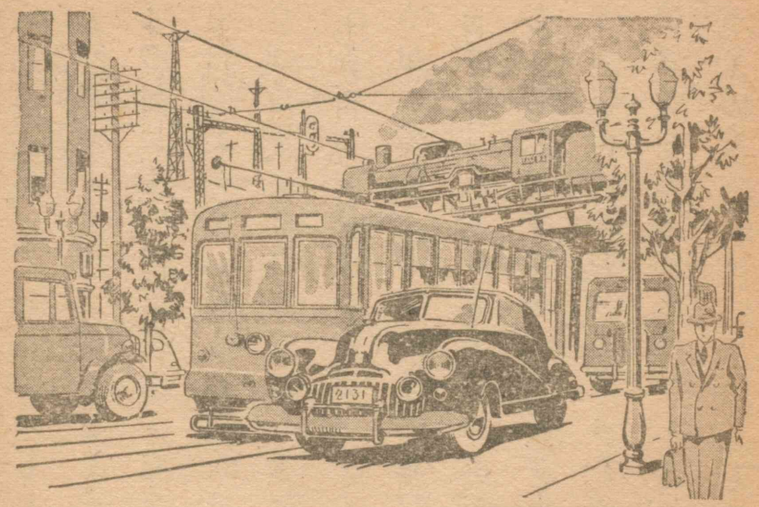
だが、川ぞいに縣道がつくられて、バスが通るようになってからは、この村もたいへんべんりになってきた。むかしは、おまつりのときに、町からいろいろな商人がはいりこんできて、市をひらいて、めずらしいものやほしいものを賣ったが、村の

人はみんな、それをたのしみにしていたものだね。

バスやトラックが、どんどん縣道を走るようになってからは、この村にも、だんだん、お店らしいものができてきた。それからは、たいていのものは、遠くへいかないでもまにあうようになったが、それまでは、なにしろたいへんなてすうだったよ。

今では、ゆうびんきょくもできて、町にいそぎの用があるときは、電話をかけたり、電ぽうをうったりして、かんたんに用をすますことができるけれど、むかしは、そんなときにも、いちいち、とうげをこして歩いていかなければならなかったのだ。」

おじいさんは、きざみたばこをふかしながら、むかしのありさまを、たいへんなつかしそうに、おもしろく話していらっしゃいます。



これは、とかいのにぎやかな通りのありさまです。
どんなべんりなものがあるでしょうか。

おじいさんのお話にもあったように、今の世の中は、むかしにくらべると、いろいろなことが、おどろくほどべんりになっています。おじいさんのお話のなかにでてきたもののほかに、今の世の中には、どんなべんりなものがあるでしょうか。

汽車、汽船、飛行機、水道、ガス、時計、えいがと、べんりなものをかぞえあげれば、

かぎりがありません。

もしこのようなべんりなものがなかったとしたら、私たちのまいにち、まいにちの生活は、どんなにふべんでしょうか。それは、ちょっと考えてみても、すぐわかることです。

ではいったい、こんなべんりな世の中になったのは、だれのおかげなのでしょうか。

これは、むずかしい問題です。こんな世の中になったのは、けっしてひとりやふたりの人の力ではありません。人間の生活をすこしでもよくしたいと思い、自分のしごとにいっしょうけんめいはげんだ、たくさんの人たちの力がなかったならば、世の中はけっして住みよいものにならなかったことでしょう。

しかし、そういう人たちのなかでも、とくに目だつ人々があ

ります。それは、いろいろな発明によって、人間の生活をたいそうべんりなものにしてくれた、すぐれた科学者たちです。

電しんきは、モールス。電話は、ベル。むせん電しんは、マルコニー。汽車は、スティブンソン。汽船は、フルトン。そして、飛行機は、ライト兄弟が、今使っているような電とうは、エジソンが発明してくれたのです。

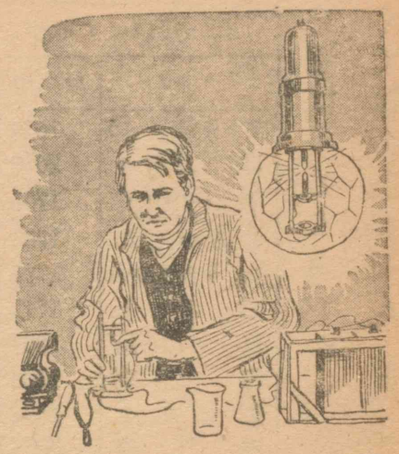
そのほか、今の世の中で役にたっているいろいろな道具やきかいは、どれもこれも、すぐれた科学者の苦心によってつくられたものです。あなたがたは、科学者たちが、そのようにすぐれた発明をしとげるために、長いあいだどんなに苦心したかということを、お話でよんだり、きいたりしたことがあるでしょう。ここでは、エジソンが電とうを発明するために、どんなに

苦心したかということを考えてみたいと思います。

エジソンよりまえにも、電氣であかりをともそうと考えていた人々がたくさんありました。たとえば、もうアーク燈というものが発明されていて、電氣を使って光をだしていました。しかし、アーク燈は、とりあつかいがふべんで、そのうえ手にいれるのもらくではありません。そこで人々は、もっとてがるに光をだせる

どこの國の、だれが、いつ発明したのでしょうか

	いつ	だれ	どこの國
ぼうえんきょう	1619	ガリレオ	イタリア人
はしらどけい	1636	ホイヘンス	オランダ人
かんだんけい（アルコールの）	1709	ファレンハイト	ドイツ人
ひらいしん	1752	フランクリン	アメリカ人
じょうききかん	1765	ワット	イギリス人
でんち	1779	ヴォルタ	イタリア人
汽船	1807	フルトン	アメリカ人
汽車	1825	スティブンソン	イギリス人
電しんき	1837	モールス	アメリカ人
電話	1875	ベル	アメリカ人
ガソリン自動車	1879	セルデン	アメリカ人
電とう	1879	スワン	イギリス人
電車	1881	シーメンス	ドイツ人
えいが	1891	エジソン	アメリカ人
むせん電しん	1896	マルコニー	イタリア人
飛行機	1903	ライト兄弟	アメリカ人



ものをつくりたいと思いました。はじめにそのくふうをしたのは、イギリス人スワンでした。それにつづいて、エジソンがけんきゅうをはじめました。

電きゅうのなかのせんの材料は、高い熱をくわえてもとけてしまうことがなく、いつまでも長もちし、そのうえ、かんたんにつくれるものでなくてはなりません。エジソンはまず、熱をくわえたときあかるく光るせんを、どんな材料でつくったらよいかということで、たいへん苦心しました。そして、手にいれることのできる材料は、みんなあつめて、それをひとつひとつためしてみたのです。ちょっと光ったかと思うと、すぐばくはつしてしまったこともなんべんかありました。しかしエジソンは、とうとう千六百しゅるいもの材料をためしてみて、やっとたんそというものでつくったせんがいちばんよいことを発見しました。

しかし、そのつぎにこまったことは、どうしたらほそいじょうぶなたんそのせんをつくることができるかということでした。そのためにもまた、いろいろな材料をあつめて、なんどもためしてみなければなりませんでした。こうして、なん百かい、なん千かいと失敗をくりかえしたのでしたが、とうとうもめんのいとでつくったたんそのせんを使ってみたとき、はじめて四十時間ものあいだ、光をだすことに成功したのです。

こうして、じっさいに使える電きゅうができたおかげで、それからのち私たちは、夜の勉強もたいへんらくになったばかり

でなく、ランプを使ったときのように、火事をだす心配もなくなりました。

このように、今使っているような電とうは、エジソンというすぐれた科学者が、長いあいだしんぼうづよく苦心して、やっと発明したものでした。しかし、ここで、もうすこし考えてみてください。これは、いったい、エジソンひとりの力だけでなしとげられたことでしょうか。

エジソンが苦心したのは電きゅうをつくることでした。しかし、電きゅうから光をださせるためにひつようなる電氣をはじめておこしたのは、いったいだれでしょうか。

電氣を人間の手で思うようにおこすことに成功した人は、エジソンよりも、百年ほどまえに生まれたイタリア人ヴォルタで

した。けれども、ヴォルタのおこすことのできた電氣の力はまだよわくて、大きなしごとをするのには役にたちませんでした。電氣がどんどん使われて、世の中の役にたつようになったのは、それから三十年ぐらいのちに、ファラデイという人が、強い力をもった電氣をおこす方法をくふうしてからのことです。しかし、こう考えてくると、エジソンの電きゅうの発明も、まえにヴォルタやファラデイのしてくれたしごとがなかったならば、あのように成功しなかったかもしれません。

そればかりでなく、このように人間が自分の手で電氣をおこすことができ、それをいつでも思うように使えるようになるまえに、電氣というものを発見したり、長いあいだ、電氣について熱心にけんきゅうをつづけたりしてきた人々があることもみ

のがせないでしょう。

むかし、ギリシアの人々のあいだにいいつたえられていた話のなかに、こはくという石をこするとふしぎな力がおきて、かるい鳥の羽などをひきつけるものだということがありました。

そこで、このふしぎな力とか、おそろしいかみなりとか、じしゃくのはりを動かす力などが、ふしぎがられて、いろいろとけんきゅうされていたようです。けれども、長いあいだ、このような力がどんなものであるか、またどんなふうに利用できるものであるかということは、わからないままでした。

ところが今から百九十年ほどまえに、アメリカのフランクリンという人が、かみなりも、こすったこはくがものをひきつける力も、同じものにちがいないと考え、かみなりのなっている

ときに、たこをあげてためしてみました。そこではじめて、人間は電氣のしょうたいをつかまえることに成功したのです。さきほどお話ししたヴォルタが、はじめて電氣をおこしたのは、このフランクリンの発見から五十年ほどのちのことでした。

こんなふうに、むかしのことまでふりかえって考えてみると、エジソンの電とうの発明も、エジソンひとりの力でやりとげたことではなく、フランクリン、ヴォルタ、ファラデイ、スワンというような、むかしのすぐれた科学者のかくれたたすけがあったことがわかります。

ところで私たちが今、まいにちなんにも考えずに使っている

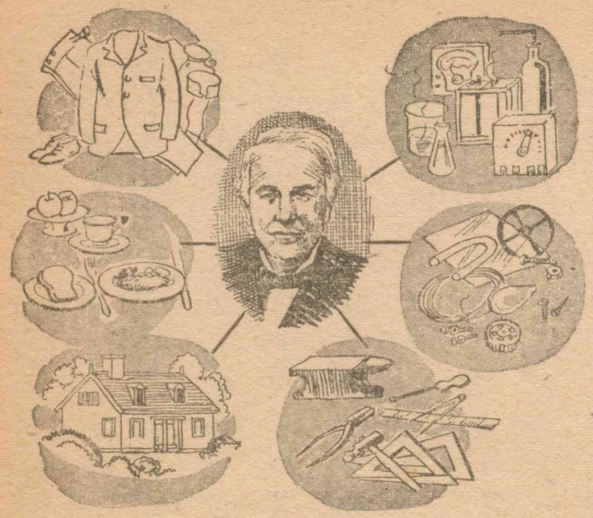
いろいろな道具についても、それをつくりだした人の苦心のほかに、それをつくりだすことをたすけたたくさんの人たちの苦心のことを考えることがひつようです。

ではエジソンが電とうを発明したときにも、その成功をたすけた人々は、フランクリン、ヴォルタ、ファラデイ、スワンなどのすぐれた科学者のほかに、もっとたくさんあったはずです。

科学者をたすけた人々

エジソンが、電とうの発明に成功したのは、このような科学者ばかりでなく、もっともっとたくさんの人々のおかげでした。私たちは、エジソンと力をあわせて、そのけんきゅうをたすけた人々、なんども失敗したエジソンを、そのたびになぐさめはげましてカづけた人々のかくれたほねおりをわすれてはなりま

せん。そういう人たちもまた、人間の生活をよくしようと苦心したりっぱな人たちです。けれども、エジソンの発明をたすけたのは、そういう人たちだけだったでしょうか。



エジソンは、あかるい電きゅうを発明するために、ひじょうにたくさんの材料を使ったはずです。また、けんきゅうにひつようだった道具やきかいも、きっとすくなくはなかったことでしょう。そういう材料や道具やきかいは、いったい、だれがつくってくれたのでしょうか。

エジソンは、きもちのよい、あか

るい光のでる電きゅうを発明して、そのころの世の中の人たちや、のちの時代の人たちの生活を、たいそうべんりなものにしてくれました。しかし、そのエジソンも、そのころいっしょにくらしていた人たちや、もっとまえの時代の人たちのおかげで、生活することもでき、けんきゅうすることもできたのです。

エジソンはすぐれた科学者として、だれひとり知らぬものがないほど、ゆうめいです。しかし、エジソンのしごとをたすけてくれた人たち、ことに、エジソンを思うように勉強させてくれた、たくさんの人たちについては、今ではその名まえをさえ、たぶん知っている人はないでしょう。けれども、もしエジソンよりもまえに、またエジソンといっしょに、そういうかくれた人たちがいなかったならば、いくらエジソンでも、あんなにす

ぐれた発明をすることはできなかったにちがいありません。

このように考えてみると、エジソンの電とうの発明のかげには、たくさんのすぐれた科学者の苦心ばかりでなく、むかしからのたくさんの人たちの、もっとゆたかなたのしい世の中にしたいというねがいが、かくされているのだということがわかります。

こんなふうに、私たちの生活をべんりでたのしいものにする発明や発見は、たくさんの人たちの強いねがいとほねおりとがあつまって、しだいにできあがってきたものです。

あなたがたが、まえに「大むかしの人々」という本でよんだように、大むかしからの生活は、たいそうふべんできゅうくつなものでした。今のべんりな世の中は、けっして、いっそくと

びにできたものではありません。

では、私たちのせんは、世の中をべんりでたのしいものにするために、どんなことをしてきたのでしょうか。私たちは、この本では、そのことをけんきゅうしてみようと思います。

二、どんなふうにして商業がさかんになり、町ができていったか

商業のおこり―人々はどんなふうにして、物と物とをこうかんしあうようになったのでしょうか

人々は、はじめ、ひつようなものを、めいめい自分でつくるというふべんなくらしをしていました。ところが、人々のなかには、畑つくりの道具とか、そのほかいろいろの道具をつくることが、ほかの人よりとくにうまい人がいました。それがわかると、しぜん近所の人々のなかには、なにかのお礼をもってきて、自分でつくるかわりに、そういう人たちに、道具をつくっ

てもらうものもでてきます。こうして、たのみにくる人が多くなると、道具つくりのじょうずな人は、あまりおひゃくしょうのしごとをしなくても、道具をつくってあげたお礼でくらしをたてていけるので、道具つくりのほうがくらしよいと考え、だんだん、道具つくりをせんもんにする人もでてくるようになりました。

いっぽう、ほかの人々にしても、米とか魚とか毛がわのようなものを、お礼にもっていって、道具つくりのじょうずな人につくってもらうほうがかんたんですし、そのうえ、自分でつくるよりも、もっとりっぱなよい物が手にはいります。また、道具をいちいちつくるめんどうがないのですから、時間もたいそうせつやくできます。その時間だけ、おひゃくしょうのしごと

に力をいれることができ、したがって、たべものもたくさんとれるというわけでした。

こういうわけですから、道具つくりのじょうずな人は、まったくおひゃくしょうのしごとをやめてしまっても、お礼だけでくらしていけるようになりました。道具をつくるかわりに、どれだけのたべものがほしいといえば、道具のほしい人は、それだけのお礼をもって、どんどんたのみにくるようになったからです。こうして、世の中がすすんでくると、おひゃくしょうのしごとをしないでくらしをたてていく人も、しだいにふえてきました。そして人々は、そのうちに、ただ道具とたべものとをこうかんするばかりでなく、いろいろの物と物とをこうかんして、ほしい物を手にいれるというやりかたも知るようになって

いきます。今ではだれでも知っている商業ということも、きっとこんなことからはじまったのでしょう。

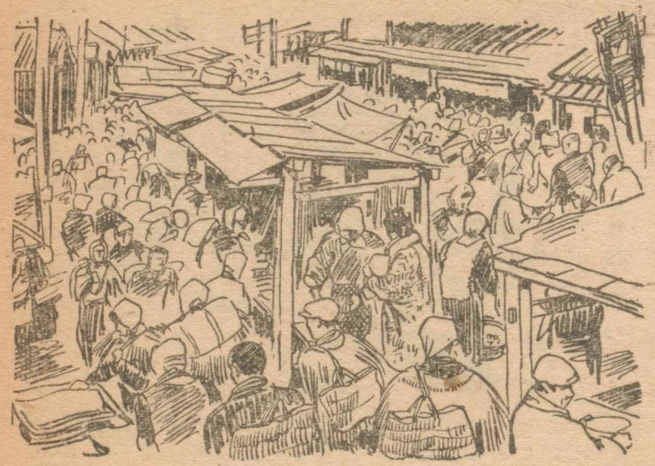
市のはじまり

むかしの古い市のありさま

しかし、自分のほしい物をもっている人をさがして、いちいち遠くまでかけるのは、たいへんほねのおれるくるしいことです。また、でかけていっても、いつもつごうよく、ほしい物をもっている人に、すぐにあえるとはかぎりません。

そこで、人々は、あることを思いつきました。それは、こうかんする

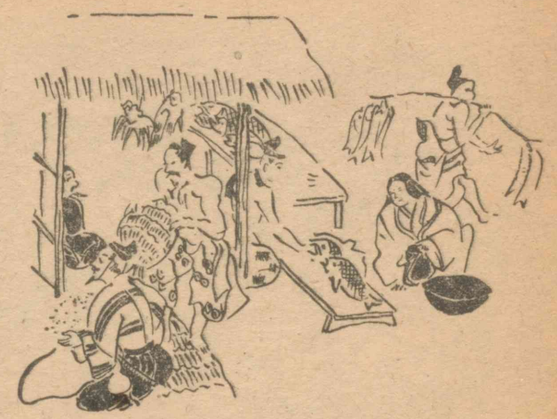
ものを、めいめいもちよって、どこかにあつまるようにしたら、たいへんらくではないか、ということです。



これは、今の市のにぎやかなありさまです。

こんなわけで、人々は、あちらこちらからやってくるのにべんりなところに、いついつと日をきめて、あつまることにしました。このあつまる日が、市の日です。市は、春や秋などのきせつに、また月ごとのきまった日に、さかんにひらかれるようになっていきました。

しかし、市は、ただ物をとり



むかしの市の日にひらかれたかんたんな店です。はじめの店は、こんなふうだったのでしょう。

かえるためだけのものではありません。市の日には、ふきんの村の人々があつまって、めずらしい物をながめたり、いろいろとかわったことを話しあったりするので、たいそうたのしみなものでした。

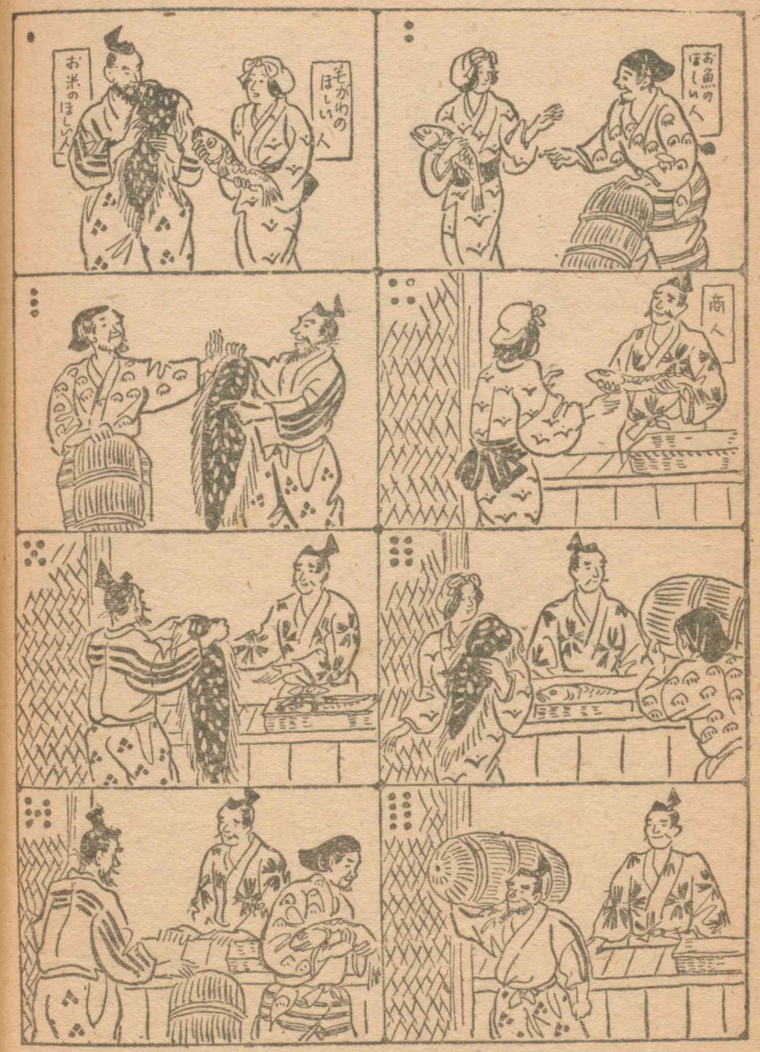
日本に市のひらかれるようになったのは、ずいぶん古い時代のことでした。今から千二百年ぐらいまえ、日本のみやこのあった奈良には、たくさんの人々が住んでいたので、早くから市がひらかれて、たいへんにぎわいだったということです。

あなたがたの住んでいる村や町には、二日市、三日市、四日市、五日市、または、四日市場、八日市場などとよばれるところがありませんか。これは、むかし、さかんに市のひらかれた場所が、土地の名になってのこっているのです。

商人のはじまり

むかしの商人。（い）あぶら賣り（ろ）なべを賣る人（は）さかなや（に）まめを賣る人（ほ）そうめん（へ）げたやなどを賣りあるく人

市がひらかれるようになったことは、人々のくらしにとって、たいへんべんりなことでした。しかしそれでも、市の日に、



この絵は、自分の物とほしい物とをとりかえあうのに、どうして商人がひつようになってくるかをしめしたものです。ばんごうのじゅんじょによんで、そのいみを考えてごらんなさい。

自分のほしいものがすぐに手にはいるとはかぎりません。ある人が、魚と毛がわとを、こうかんしたいと思っていても、その市の日に、つごうよく、毛がわと魚とをこうかんしたいと思っている人に、であうとはかぎらないからです。

たとえば、ちょうど、毛がわをもっている人にであっても、その人は魚をほしがらないで、お米をほしがっていました。また、お米をもっている人は、毛がわをほしがらないで、魚をほしがりました。こんなときには、三人の人がうまくいっしょにであいでもしないかぎり、こうかんすることはできないわけです。

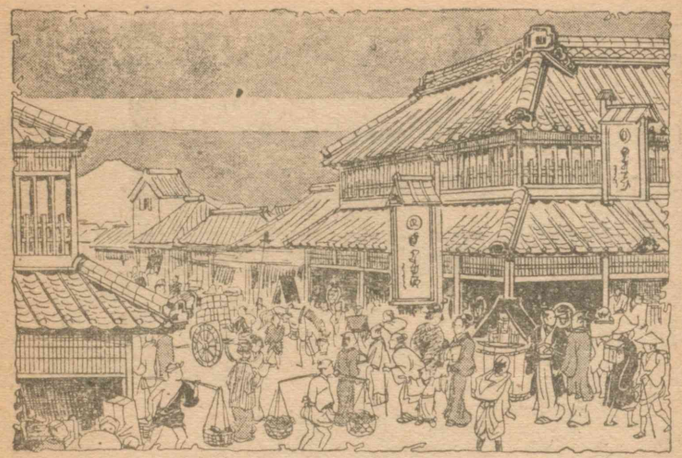
いったい、こんなときには、どうしたらよいでしょうか。こうかんのせわをする、商人というものが、あればよいのです。

商人は、自分では、なんにもつくらないで、ひとのものと、ひとのものとをとりかえてやります。まえまえから品物を用意しておいて、買いにくれば、いつでもまにあうようにしておいてやります。人々のうちには、このようにしてくらしをたてる商人というものが、だんだんでてくるようになりました。

これは武士の世の中のはじめのころの店の絵です。市のたつところには、しだいにこんな店ができていくようになりました。

これで、人々はもう、むかしのように、いちいち自分のほしい物をさがして、歩きまわるひつようがなくなったわけです。市のたつときには、いつもたくさんの商人がやってくるようになりました。そし

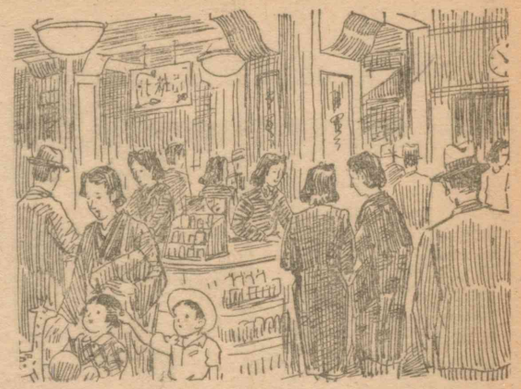
て、その土地に店をつくって、さいごには、そこに住むようにさえなっていきました。



これは武士の世の中のころの、江戸の町のにぎやかな町のありさまです。江戸や大阪などの大きな町には、こんなりっぱな店ができてくるようになりました。

もっとも、店といっても、はじめはそまつでかんたんなものだったでしょう。しかし、それが、だんだんりっぱな店になり、貴る品物も、米屋ならお米ばかり、さかな屋ならさかなばかり、というように、なにかをせんもんに貴るようになっていったのです。

このようにして、物と物とを



マーケットやデパートのなかのありさま。むかしの店とくらべてごらんなさい。

てそれとともに、いろいろな商品をつくるしょくにんのしごともふえていきました。

かへい

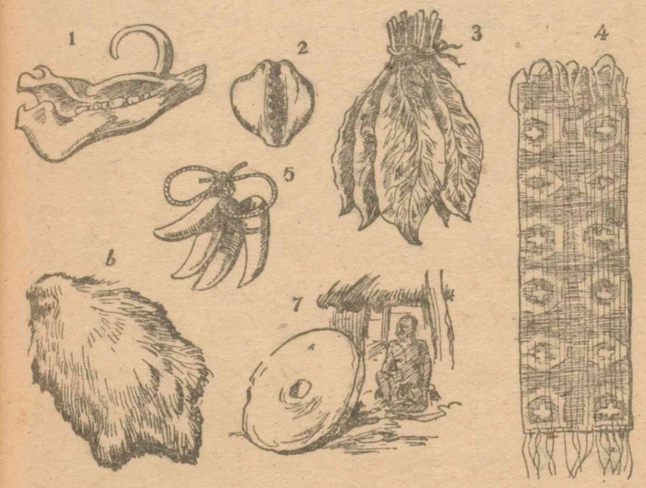
商業がさかんになるためには、もうひとつたいせつなものがこうかんしあってくらしていくことが、だんだんさかんになるにつれて、商人のかつやくもめざましくなっていきます。そし

かへいは、この絵でみてもわかるように、これを使えば、賣ったり買ったりするのにたいへんべんりです。

ひつようでした。それは、物を賣ったり買ったりするときに、私たちが今使っているおかねーかへいーです。はじめ人々は、おかねを使わずに物と物とをこうかんしていました。しかしそのうちに、物と物とのこうかんは、ふべんなことが多いということに氣がついてきました。たとえば、魚と米とをこうかんしたいと思っても、あいてが魚はいらないといえば、こうかんできません。こうかんしてくれる人をさがしているうちには、魚がくさってしまうようなこと

もおこってくることでしょう。また、重い物をもって遠くまでこうかんにでかけるのは、たいへんくるしいことです。それに、こうかんする物がちがうので、こうかんするわりあいをきめるのもたいそうめんどうでした。

こういうふべんがあったために、むかしの人々も、ずっとまえから、おかねのようなものがほしいと思っていました。それで、はじめは、稲やおりもののような、みんながほしがる品物を、おかねのかわりに使っていました。おとなりの中国などでも、はじめはやはり、貝や小刀やおりものを、おかねのかわりにしていたということです。



これは、むかし使われていためずらしいかへいです。このなかのあるものは、今でも、かへいとして使っているところがあります。1.けだもののきば　2.かいがら　3.たばこのは　4.おりもの　5.けだものの つの　6.毛がわ　7.大きな石のかへい

しかし、とうとう、中國の人々は、かんたんで、もちはこびのべんりな銅で、おかねをつくるようになりました。そしてそれが、どこでも使われるようになったのです。奈良にみやこがおかれたころ（今から千二百年ぐらいまえ）、私たちのそせんも、そのおかねをまねて、はじめて、銅のおかねをつくりました。けれども、ふつうの人々は、まだそれを、どんなふうに使ってよいかよくわかりませんでした。それに、商業もまだあまりさかんでなかったので、おかねが世の中に廣く使われるようになるまでには、だいぶ長いあいだかかったのです。

日本でむかし使われていたいろいろなかへいです。(1)は奈良にみやこのあったころ、はじめてつくられたもの。(2)、(3)は武士の世の中になって使われるようになった中國の明という國のかへい。(4)、(5)はそのうちに日本でつくられるようになった金のかへい。(6)はやはりそのころの紙のかへい。

しかし、武士の世の中になると、市があちらこちらにひらかれ、商業や工業がさかんになってきました。そうなると、どうしても、おかねを使うことがひつようになります。そこで、長いあいだ、あまり使われていなかったおかねが、こんどはどしどし使われるようになっていきました。

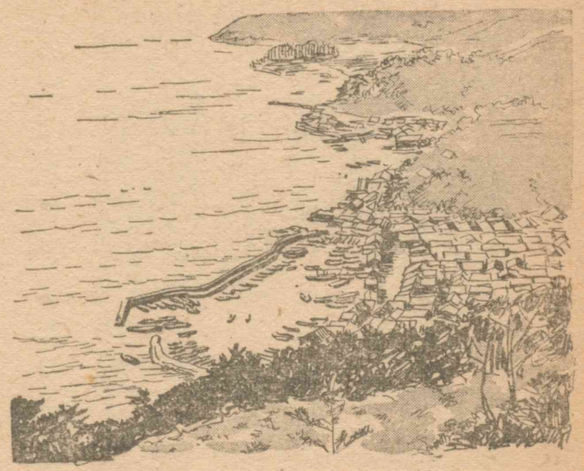
もっとも、そのころ使われていたおかねは、はじめのうちは、中國から、商人たちがもってきたものでした。しかし、そのうちに、日本でも、金や銀や銅などを材料にして、かへいができ

るようになりました。

村から町へ

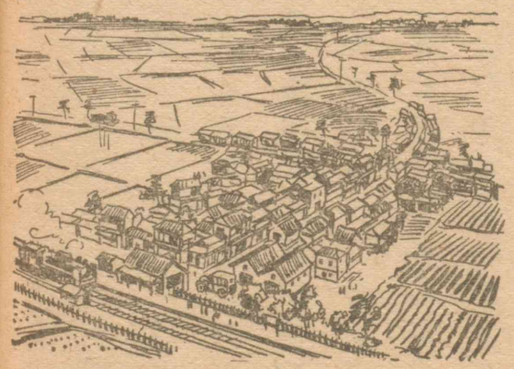
私たちの住んでいる村々をよくみると、村であるのに、町のようにぎやかなようすをしているところがあるのに氣がつきます。たとえば、村のなかや、その近くに、大きな工場がたてられているところをみてごらんなさい。人々は、畑しごとをするかわりに、工場にはたらきにいきます。そして、ふきんには、工場ではたらく人々のために、いろいろな店やたてものが、どんどんつくられています。

また、入江やわんやみずうみにそった村の、船つき場の近くなども、たくさんのくらや、やどやや店がたちならんで、たいへんにぎわっています。



入江にそったいなかの村

そのほか、汽車の駅のふきんや、のりあいバスのていりゅうじょの近くなどは、汽車やバスにのりおりする人々のために、いつのまにか店がたちならび、やどやがなんげんもたったりします。そしてときには、荷物をいれておくためのくらもたって、村でもたいへんにぎやかなところになってい



鉄道の駅のまえ

ます。

このように、今私たちの住む村のなかでも、しだいに村が町へとかわっていくありさまをみることができるのです。

むかし、村ばかりしかなかったときに、だんだん町ができてきたころのありさまも、これとたいへんよくにていました。

武士の世の中になってから、日本のむかしの人々のあいだでも、商業という新しいしごとが、さかんにおこなわれるようになってきました。そして、人々のあつまるにぎやかなところには、商人やしょくにんが住みついて、村のくらしとはちがった、町の生活がはじまるようになりました。

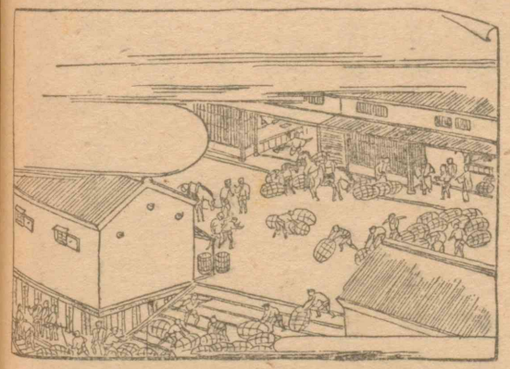
いったい、どんなところが、早く町になったのでしょうか。

ずっとむかしから、奈良のみやこや、京のみやこは、日本の

政治の中心地で、にぎやかな町でした。しかし、武士の世の中になって、だんだん商業がさかんになってくると、いなかもひらけ、あちらこちらに町らしいものができてきました。

神社や寺は、人々のよくあつまるところだったので、そこに

寺や神社の門のまえには、このようなにぎやかな町ができるものです。あなたがたの住んでいる村や町の近くには、こんなところがないでしょうか。

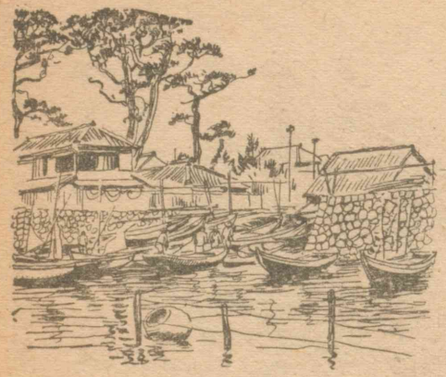


むかしの大阪の町の川にそったところ。川をゆききする船に、くらにしまってあったいとのたわらがつみこまれてはこばれるところです。大阪の川ぞいの通りには、このようなくらがたくさんたっていて、にぎやかでした。

は、よく市がひらかれました。そして、商人たちも、だんだんその土地に店をひらいて住みつくようになり、しだいに町らしいようすになっていきました。

また自動車や汽車のなかったむかしは、海や川が、人々のゆききをするのによく使われました。ですから、港のふきんも、いつのまにか、人々があつまって、町らしくなっていきました。

こんなふうに、港や、神社や寺のまえなどは、商業がさかんになってくると、そこが、いちばんはじめに町らしくなり、それが、だんだん大きくなっていったのでした。

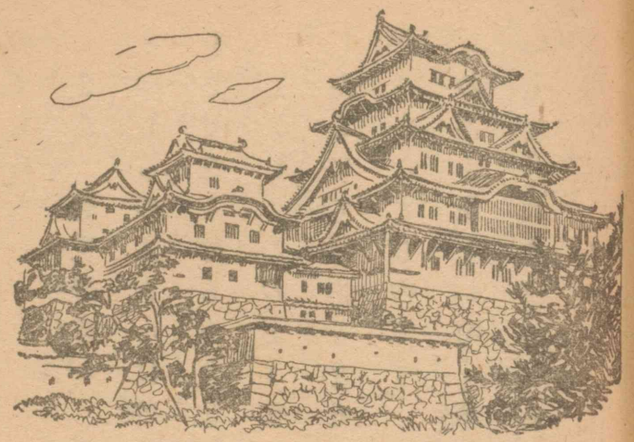


わたし場のありさま

町の人々

今から、四百六、七十年ぐらいまえ武士の世の中がみだれて、日本全國がたくさんのとのさま—大名とよばれていました—によって、三百ぐらいの小さい國のようにわかれて、あらそった時代がありました。大名たちは、自分の國を強くするために、いろいろと力をつくしていました。そして、大きなしろをつくって、自分のすまいにしていました。そこで、今までいなかで田畑をたがやして、住んでいたけらいの武士たちは、大名のしろのまわりにあつまって、いっしょにくらすようになりました。

大名たちは、武士ばかりでなく、おおぜいの人を、しろのある町にあつめて、ぜいたくなくらしをはじめました。そこで、大名のいる町には、いろいろの商人・しょくにん、そのほか歌



姫路の町にあるむかしのしろ

うたい・学者などが、あつまってきました。大名は、あるときには、命令をだして、商人を自分の町にうつらせたこともあります。また、あるときには、商賣がうまくやれるようにせわをしてやって、商人やしょくにんが、ひとりでにしろのある町へあつまってくるようにしたこともあります。

みだれていた武士の世の中をおさめた織田信長は、安土—琵琶湖のそば—にしろをきづいたとき、こんなめいれいをだしました。それは、「京都にいったり、きた

りする商人たちは、これから、かならず中仙道からはなれた、この安土の町を通り、そこでとまらなくてはいけない。」というのでした。

また、豊臣秀吉が、大阪に大きなしろをつくったときにも、そのしろのふきんに堺の町の商人たちをうつり住ませて、商賣をさせたこともありました。

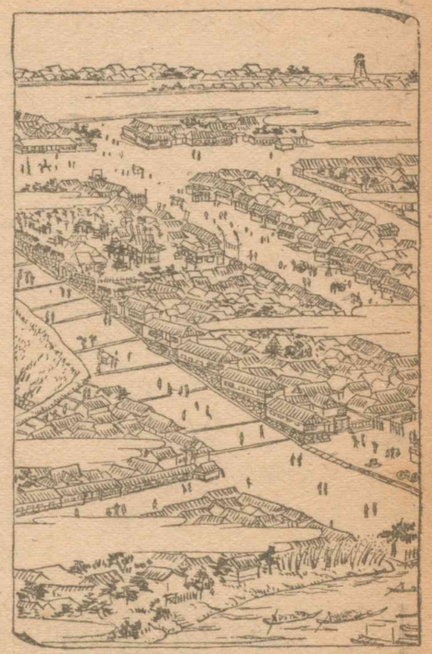
しかし、このようなことは、信長、秀吉のような大名だけがしたことではありません。どの土地の大名も、みな同じように、やったことなのです。それで、あちらこちらに、どしどし、しろのある新しい町―城下町―ができてきて、しだいにさかえていくようになりました。

今でも、むかし、しろのあった町には、呉服町、大工町、鍛

冶町、魚町というような土地の名がのこっていますが、これも、同じ商賣をする商人やしょくにんたちが、ひとところにあつまってくらしていたところのあとです。

しかし、このころになって、町がさかえはじめたのには、まだこのほかにもわけがありました。

商人たちのかつやくした場所は、せまい日本の國のなかだけではありませんでした。武士たちは、めずらしいもの、べんりなものを、できるだけたくさん手にいれたいとのぞんだので、商人たちは、遠い海のむこうにまで、でていくようになったのです。商人たちは、なんせきもの商船をつくり、それにたくさんの人をのりこませて、とちゅう、あらしにあったりかいぞくにおそわれたりしながら、もうけの多い商品を外國に賣り、め

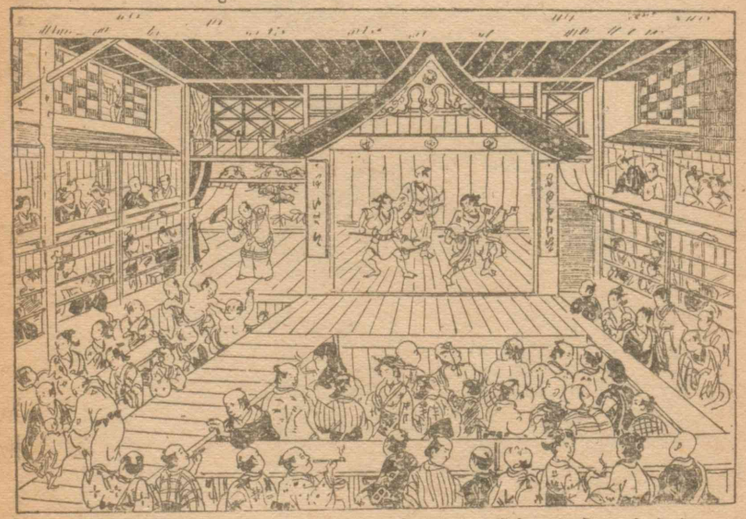


むかしの江戸の九段のふきんのありさま。まんなかにたちならんでいるのは、武士たちの家です。

せまい日本の國のなかだけで、かつやくすることになります。しかし、國のなかだけだったにしても、商業がさかんになればなるほど、商人たちが住み、商人たちのかつやくする町は、しだいしさかえていきました。大阪や江戸というような、大きな町が、このころからさかえて、日本の商業の大きな中心地となずらしい品物を手に入れてきたのでした。もっとも、今から三百年ぐらいまえ、外國にでかけることがゆるされなくなってからは、商人たちは、

っていったのもこのためです。

そのころ江戸の町の人々は、百万ぐらいもあったということです。また商業のさかんな大阪は三十五万、ながいあいだみやこのあった京都は、四十万という人が住んでいました。このほか、今のとかいは、たいていこのころに大きくなったものです。あなたがたの住んでいる町は、その時代にはどんなふうだったでしょうか。



しばいを見る江戸の町の人々。江戸や大阪のような大きな町では、こんなしばいがたいへんさかんでした。

いなかの人々ー新しい村ができるー

にぎやかな町がたくさんできて、商業もたいへんさかんになってきましたが、それにつれて、農業もさかんになり、あちこちに新しい村ができるようになりました。

いつぽう大名たちは、みやこの近くでも、いなかの方でも、自分のおさめている國をゆたかにしていくために、いろいろとくふうをしていました。

農業は、人々のたべものや、きものの材料などをつくるたいせつなしごとです。そのうえ、このころは、米がおかねのかわりになっていたほどでした。ですから、大名のおさめている土地は、そこでとれる米の分量であらわされて、なん万石ということようによばれていました。武士たちも、大名から、おかねのかわりに、米をもらってくらしていました。武士たちは、城下町に住んで、いなかの人々のつくる米をたよりにしてくらしていたのです。

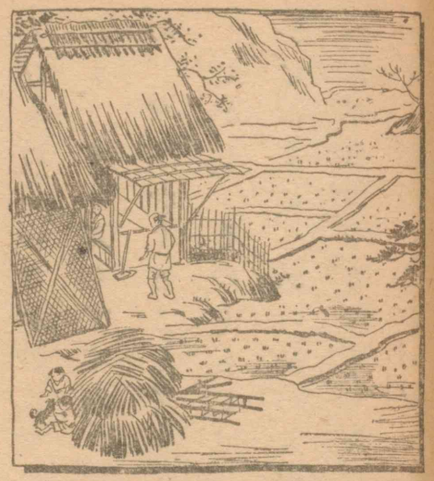
そういうわけで、大名も武士たちも、とくべつに力をいれて、農業をさかんにしなければなりませんでした。そこで、今までたがやされていなかったあれ野や水けの多いひくい土地なども、どしどしかいこんされていきました。そうなると、

新しく田や畑をつくっていくありさま

新しい土地に住みつく人もふえていきます。新しい村は、このようにして、あちらにもこちらにもつくられていったのでした。今の東京に近い、そのころむさしのとよばれていたあれ野が、今のように、かいこんされてきたのも、このころのことです。

あなたの住んでいる地方に、新田（にった）という名まえのついているところがのこってはいないでしょうか。そういう土地は、おもに、このころひらけていったところが多いのです。この新田のなかには、商人たちが、おかねをだして、いなかの人々にかいこんさせたものも、ずいぶんあります。

新しい土地が、かいこんされていったばかりではありません。いろいろな作物も、しだいにたくさんつくられるようになりました。紙をつくる材料になるこうぞ、美しいそめものをつくる



江戸の世の中のいなかの人々の家

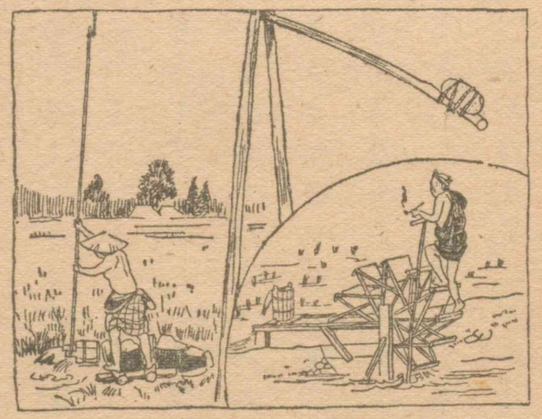
のにたいせつなあい・べにばな、きれいなしっきをつくるのにひつようなうるし、きものの材料になるあさ、そのほか、くわやちゃなどもそうです。また、外國からつたわってきたたばこ・わた・じゃがいも・さつまいもなどの新しい作物も、たくさんつくられるようになりました。今いなかの人人のたいせつなしごとになっているかいこをかうことも、このころからたいへんさかんになってきたのでした。

また、畑しごとに使うべんりな道具も、くふうされました。みぞから水を田にいれるのにも、はねつるべ・ふみぐるまなど

が発明され、たいへんらくになりました。うしやうまが、畑しごとのてだすけに、廣く使われるようになったのも、このころからです。

このように、むかしにくらべると、新しい田や畑もふえ、村もひらけ、いなかの人々のしごとも、ずいぶんすすみ、田や畑のしゅうかくもましてきました。

しかし、そのくらしは、どうかというと、あいかわらずたいへん不自由なものでした。それは、武士たちが、いなかの人々のくらしのこまかいところまで、いろいろとさしずして、とり



これは、はねつるべやふみぐるまを使って、みぞから水を田にいれているところです。あなたがたの住んでいるいなかで、こんなものを使っているところはないでしょうか。

しまったからです。おひやくしょうたちは、「米は、たべてはいけない。むぎ・あわ・ひえなどをたべろ。」「きものは、もめんしかきてはいけない。」「ぜいたくをしてはいけない。」などと、いわれていました。

こういうさしずは、村のかしらであるなぬし―ところによっては、しょうやとよばれていました―から、村の人々につたえられたのです。村の人々は、五けんずつひとくみになっていて、そのなかのだれかがぜいをおさめることができないと、ほかの人たちがみんなでだしあわなくてはなりませんでした。またそのうちのひとりでもわるいことをすると、五けんのものがいっしょにばつをうけました。こんなふうですから、村の人たちのくらしは、たいへんきゅうくつなものだったのです。

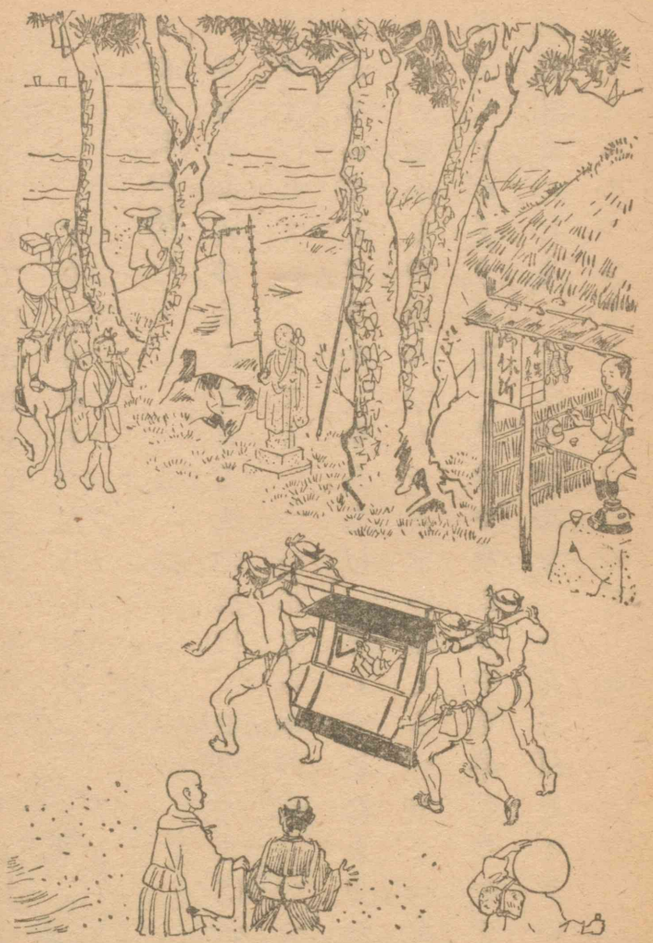
そのうえ、このころの世の中は、日本の國が、いくつかの小さい國にわかれていて、おたがいにたすけあってくらしていくこともしていませんでした。ですから、大水やひでりがつづいて、田畑があれ、米がとれなくなり、人々がたいへんくるしんでいても、ほかの國が、助けるというようなことはありませんでした。

こんなわけで、いなかの人々は、町の人々とちがって、たいへんくるしい生活をしなければならなかったのです。

三、人々はむかし、どんなふうにしてゆききをしたり、ものごとをしらせあったりしたか

むかしの旅

あなたがたの住んでいる土地には、旧道とよばれる道路や、そうよばれていなくても、古い松なみ木の長くつづいた道路などがないでしょうか。私たちは、そんな道路を歩いていくと、よく、むかしの人のつくった旅の道しるべや、一里づかなどをみることがあります。汽車や自動車や電車のなかったむかしは、旅行するのにも、こんな道路を、わらじばきで歩いたり、うまやかごにのったりしていったのでした。



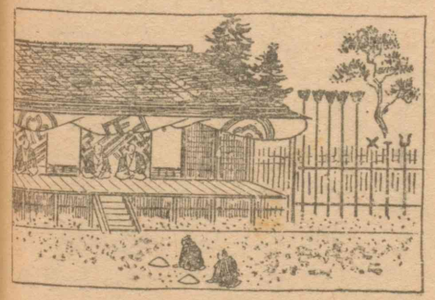
まだ東京が江戸とよばれていた今から百年ぐらいまえまでは、江戸から大阪にいくのにも、東海道とよばれていた道路を、足にわらじをはき、かたに荷物をぶらさげたすがたで、てくてく歩いていったのです。江戸と大阪のあいだは、

百二十里ぐらい―だいたい五百キロメートル―ありました。一日に六里歩いたとしても、いきつくのに二十日はかかるかんじようです。いそぐときには、うまにのって走り、とくべついそぐときには、ときどきうまをのりかえてかけつけましたが、それでも、五日ぐらいはかかりました。女の人や、こどもや、足のよわい人は、かごにのっていくことが多かったのですが、それにはずいぶん高いおかねをはらわなければなりませんでした。そのうえ、かごは、汽車のようにのりごこちもよくありませんし、ひとつのかごにずっとのりつづけていくというわけにもいきませんでした。

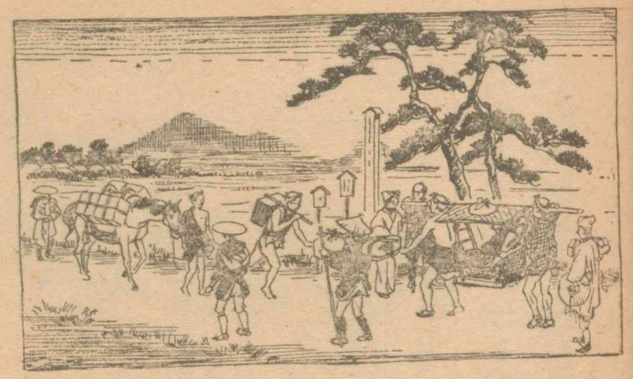
しかし、むかしの旅の苦労は、のりもののふべんや遠い道のりということばかりではありませんでした。武士たちが、おた

がいにあらそいばかりしあっていた、今から四百年ぐらいまえのころは、國のなかもみだれ、道路もたいそういたんでいて、ぬすびとがあちらでもこちらでも旅びとをおそいました。それに、ほうぼうに関所というものがつくられていて、旅びとからも、商人の送ったり、はこんだりする荷物からも、高いおかねをとりあげていました。ですから、そのころの人々にとっては、長い旅にでかけるということは、ほんとうにいのちがけのしごとだったにちがいありません。

しかしそのうちに、世の中が平和になると、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康のような強い大名たちは、もっとらくで、

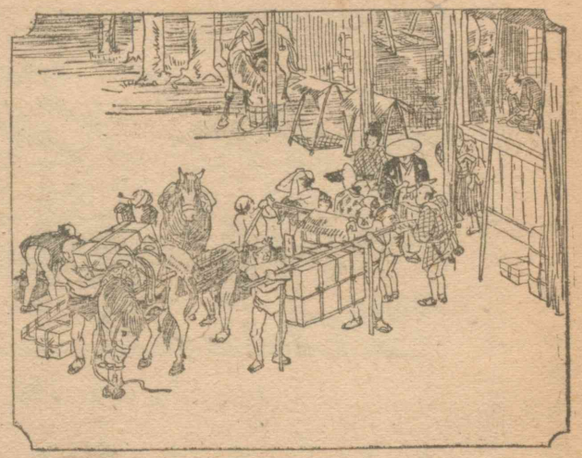


これは、江戸時代の関所です。そのまえはもっとそまつなものでした。



むかしの旅のありさま

あぶなくない旅ができるように、いろいろとほねをおりました。そして、まずはじめに、いたんだ道路をていれして、りっぱな道路をつくりました。江戸をもとにして、大きな道路がいくつもできましたし、いなかの方でも、そこに住む大名たちの力で、だんだんよい道路ができるようになっていきました。そういう道路のうち、とくに廣いものは、道のはばが、五間（十メートルぐらい）もあって、両がわには、まつなどがうえられていました。そして、道の長さをしめすために、一里づかのような道



これはむかしの宿場のありさまです。旅びとは、ここで休んだり、かごや馬をのりかえたりして旅をつづけました。

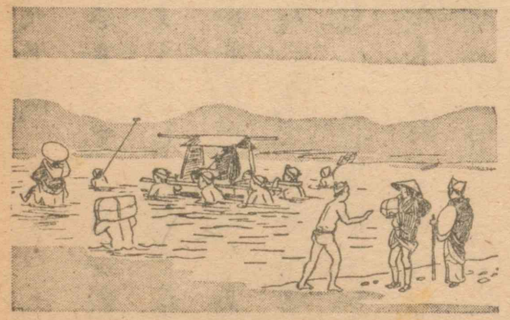
しるべがつくられました。

こうして、だんだん道路がりっぱになってくると、人々のゆきき も、たいへん多くなります。そこで、旅びとのとまるやどや や、うまやかごなどののりもの を用意してある宿場が、だいた い二里か三里ごとにできてくる ようになりました。

このようなわけで、旅行も、むかしにくらべれば、たいへん らくになってきました。しかし、それでも、まだ思うように、 そして、らくにゆきができたとはいえませんでした。かずは

すくなくなりましたが、まだ箱根のように関所があって、いち いち通行人をしらべていましたし、高いとうげをこえたり、川 を歩いてわたったり、人のかたにのってわたったりすることを、 たびたびしなければならなかったからです。

むかしのわたしぶね



むかしはこんなふうにかごにのったり、人のかたにのったりして川をわたりました。

まだそのころには、おかをきりひらいたり、トンネルをほったり、川にりっぱな橋をかけたりすることが、なかなかできませんでした。そのう

え　あちらこちらの大名は、ほかの土地とのゆききが、よくできるようになるのをきらって、自分のおさめているところの道路だけしか、よくしようとしなかったのです。

こんなわけで、むかしの道路は、あまりりっぱにできていたとはいえませんでした。今、日本の道路が、ほかの國にくらべて、道のはばがせまく、つくりかたもよくないのは、こんなところにもとがあるのかもしれません。

道のおこり

はじめ人々は、野山をかけまわり、けだものをつかまえ、木のみ、草のみをひろい、川やあさい海で、さかなをとったり、貝をひろったりして生活していました。人々は、すこしずつ、ばらばらにわかれてくらしていましたが、ほかの人々といったりきたりするひつようが、あまりなかったので、とくべつ道をつくるということはありませんでした。

しかし、人々が、野山をかけまわったり、たいせつなのみ水をさがすのに、いちばんべんりな通りやすいところを、いくども歩いたりしているうちに、そこだけがふみかためられ、草もなくなって、道ができました。いちばんはじめにできた道は、きっとこんなふうにしてつくられたものでしょう。

人々は、そのうちしだいに、田畑をつくり、おもに農業でくらしをたてるようになってきますが、そうなると、もう今までとはちがって、ひとつの土地に住みついて生活しなければならなくなります。そして、だんだんぶらくができあがり、みんなで助けあってくらしていくことがひつようになってくればくる

ほど、ほかの人々とゆききをすることも、いよいよ多くなってきました。

道は、このようにして、はじめは、ぶらくのなかで、ほかの家とゆききするためにつくられました。また、遠くにある田畑へたがやしにいくためにも、つくられました。しかし、そのうちに、ほかのぶらくにいくための道もできるようになってきました。なぜなら、農業をやっていくためには、みぞをほって、田畑に水をひき、またいけをつくって、水をためておくひつようがあります。こんな大しごとは、どうしてもほかのぶらくの人々とたすけあって、やらなければできなかったからです。こうして、ぶらくとぶらくとのあいだにも、思うようにゆききができるように、どんどん道がつくられるようになりました。

道をつくる人々

しかし、そのうちに、人々は、商業のおかげで、たいそうべんりな生活ができるようになってきました。ほかの土地のめずらしい物と、自分の土地でできる物とをとりかえあって、ゆたかなくらしをすることができるようになったのです。しかし、品物をとりかえあうためには、まずだいいちに、ほかの土地とゆききをする道がひつようです。そこで、しだいに商業がさかんになり、世の中の人々が、おたがいにほかの土地の人々のつくるものにたよってくらしていくようになると、道路もますますふえ、りっぱな

大きなものになっていきました。

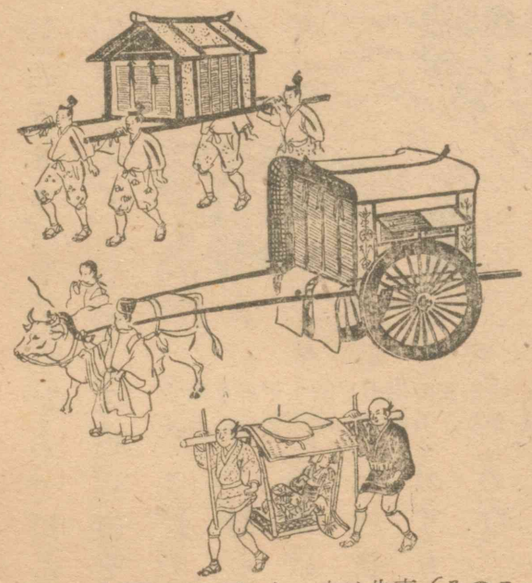
こんなふうにして、はじめは、人々がゆききをしているうちに、いつのまにかふみかためられてできた道も、しだいに人間の手でつくられるようになっていったのです。

こんなわけですから、奈良にみやこのおかれたころには、日本の道路も、かなりよくなってきていたと考えてよいでしょう。日本國じゅうどこへいっても、たいてい道路があり、そのうえところどころには、旅をする人々のためにとまるところもつくられていたということです。

むかしののりもの

ずっとむかしから、人々がのりものに使っていたものに、うまがありました。野山でかりをするときにも、旅にでかけると

きにも、身分の高い人々は、うまを使っていました。うまのほかに、かごやこしとよばれるものがありましたが、こののりものは、人がかたにかついでいくものだったので、やはり、身分の高い人でなければのれませんでした。そのうちに、人がかつぐかわりにうしにひかせる牛車もできてきましたが、これもやはり、身分の高い人ののりもので、いっぱんの人たちがのることのできるようなべんりなものではなかったのです。



上は、人がかついだこし。中は牛車（そのころぎっしゃとよばれていました）。下はかご。

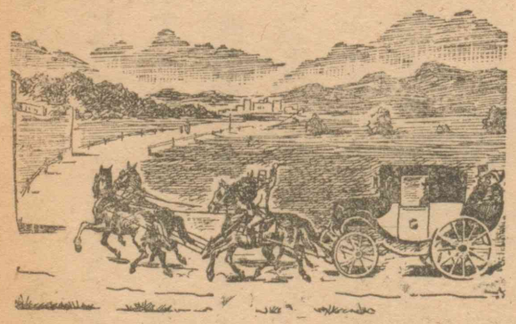
そののち、武士のあいだでは、うまをどんどんのりものに使うようになりました。そこで、はじめは身分の高い人だけが使っていたうまも、しだいにいっぱんの人たちが使えるようになっていきました。そのころ遠い道をらくに早くいく方法は、うまにのるほかにはなかったのです。

上の絵は、いそぎの用事で武士が馬を走らせているところ、下のは、荷物をはこぶ馬

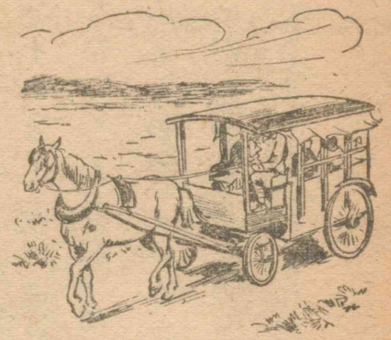
けれども、むかしの日本では、馬車は、牛車のように、のりものには使われませんでした。馬車をのりものとして使うようになったのは、今からやっと八十年ぐらいまえの明治の世の中になってからのことです。これは、たぶん道路

がわるくて、牛車よりも早い馬車をうまく走らせるのにはつごうがわるく、かえってうまのせなかにのったほうがべんりだったからかもしれません。荷物をはこぶのにも、うまに車をひかせて、それにのせるということをせず、せなかにくくりつけたことが多かったのでした。

外國では、むかし、よく、馬車が、使われました。それも、はじめは一頭でひいたものが、二頭、三頭、六頭とふえたので、いくにんもの人たちが、一だいの馬車にのって旅行することもできました。これは、日本にくらべると、むかしからよい道路がつくられて



外國では、むかしこのような急行馬車がさかんに使われていました。



いなかののりあい馬車

いたからでしょう。

日本では、明治になってはじめて、馬車が使われたわけですが、そののちに、自動車がさかんに使われるようになると、だんだんすくなくなり、今では、荷馬車のほかには、いなかで、たまにみかけることのあるのりあい馬車がのこっているだけです。

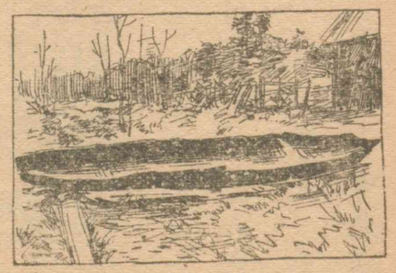
水の上の交通

船のはじまりは、うきだといわれています。人々は、草の葉や、木の板が、水にうかんでいるのをみて、かるいものは水にうかぶ、ということを知りました。そして、大きなまるたをうかべて、それにのることをおぼえました。まるたやたけやあし

などをくみあわせると、のるのにつごうのよいいかだができます。しかし、いかだでは、水をかぶりやすくてこまるので、太い木のみきを切り、まるきぶねをつくりました。人がのるところは、深くくりぬいてつくったのです。人々が、いちばんはじめにつくった船は、こんないかだやまるきぶねでした。

南のあつい地方に住む人とまるきぶね

しかし、今の世の中でも、こんなかんたんな船を使うこともあります。南のあつい地方に住む人々のなかには、まるきぶねにのって、島と島とのあいだをゆききしてい

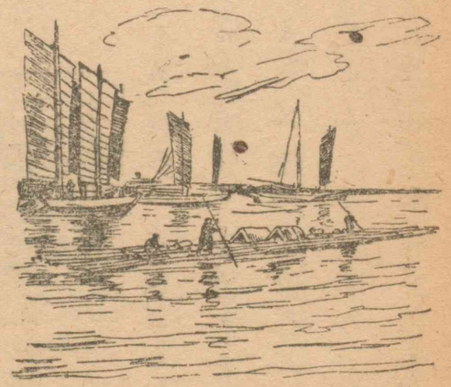


千葉縣のいなかでほりだされた、日本の大むかしの人々の使っていたまるきぶね

る人々もいます。また、中國の揚子江（ヤンツー川）という大きな川では、いかだの上にほをはって、こやをつくり、川を流れくだる人々もあります。

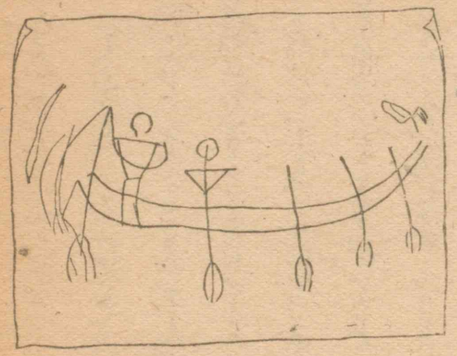
はじめのうち、川や海やみづうみは、人間が歩きまわるためには、たいへんつごうのわるいじゃまものだったにちがいありません。しかし、いかだやまるきぶねが発明されてからは、かえって、人々がゆききをするのにつごうのよいものになりました。

ことに大むかしの日本には、あちらにもこちらにも森があったうえに、ぬまやいけも多くて、陸の上のゆききは、なかなか



揚子江のいかだ

むずかしかったのです。ですから、船を利用して、川や海をゆききするほうが、かえってべんりだったといってよいでしょう。また、日本は、海にかこまれた島の多い國でしたから、人々は、ずっとむかしから、船にのって海にでることにも、よくなれていました。



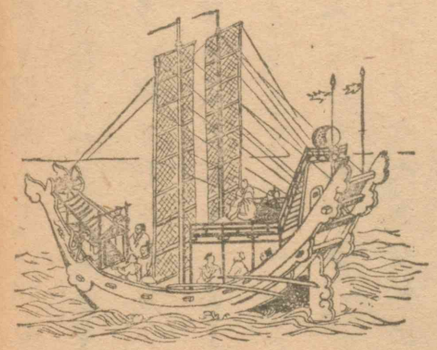
土のうつわにかかれた船をこぐ人々

この絵をみてごらんなさい。人々は、まるきぶねのような大きな船にのって、こいでいます。いかだやまるきぶねは、こんなふうにろを使って、なんにんかの人が力をあわせてこいだものでしょう。あさいところなら、もちろん、ぼうでおしながら、進んでいくこともで

きました。

しかし、ろでこぐばかりでは、とても長いあいだこぎつづけることができません。そこで、人々が思いついたのは、風の力を利用することでした。船の上にほをはり、風のいきおいにおされながら、進もうというわけです。これならば、らくに長い旅をすることができます。遠い海のむこうの國々とゆききをするのに、むかしの人々は、長いあいだこのような船を使っていました。

しかし、風の力を利用する船は、もし風が、進もうとする方向に吹かなかったら、動くことができません。

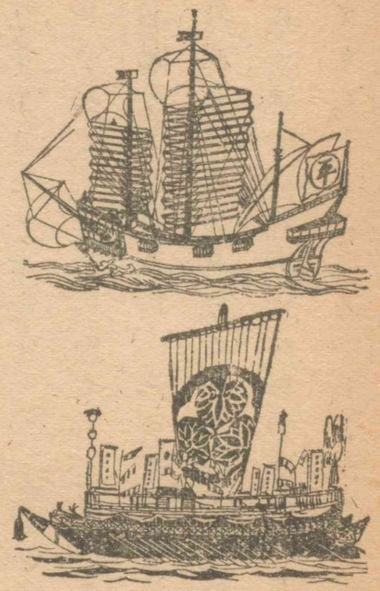


むかし、奈良にみやこのあったころ、中國の唐の國に使いにいく人々の使った船。

ですから、なん日でも、つごうのよい風の吹いてくるまで、じっとまたなくてはならないことも、しばしばおこりました。

今から、千三百年ぐらいまえ、新しいすぐれた学問をならうために、日本からはじめて、中國に使いがおくられました。このとき使われた船は、そのころのものとしては、たいへんりっぱな大きな船でした。しかし、それでも、ほをはるしかけなどもじゅうぶんでなく、海をわたるあいだに、あら波にあって、たいへんくるしい旅をしたということです。そのうえ、日本の港をでるときには、つごうのよい風のふいてくるまで、なん日でもまたなければならなかったのですから、たいそう日かずのかかる長い旅だったわけです。

それからのちも、日本から、大陸にむかって、なんかいも使



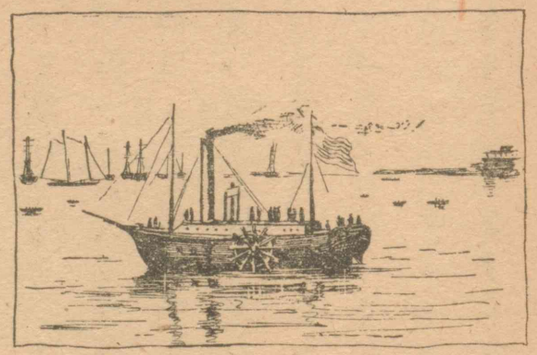
武士の世の中のころ、大陸とのゆききや、いくさに使われた船は、おもにこんなものでした。

ばかりでなく、ろもいっしょに使うことが考えだされました。けれども、やはり、あの廣い海を、なにひとつだよりになるようなきかいもない木の船でわたることは、たいへんくるしい、そしてあぶないしごとでした。

ほやろだけで大きな海をわたることがあぶなかったのは、日本でも、外國でも、同じことでした。世界じゅうの人々が、こいの船がいき、人々のゆききも、しだいにさかんになりました。船も、だんだん大きくなり、りっぱなものができるようになりました。ほでははしる

のために、思うようなゆききができなかったのです。しかしとうとう、今から百四十年ほどまえに、アメリカのフルトンという人が、じょうきの力で、船を進ませる汽船を発明しました。この発明があってから、海の旅も、みちがえるほど、早くて、らくなものになりました。

しかし、私たちのそせんは、まえにもお話ししたように、三百年ほどまえから、外國とのゆききをとめられるというようなことがおこったために、武士の世の中がおわりになるころまで、汽船を知りませんでした。アメリカから、ペリーという人にひきいられて、四そ



フルトンの発明したさいしょのじょうき船

うのじょうき船が日本にやってきたとき、はじめてこのようなりっぱな船をみた人々のおどろきは、たいへんなものだったということです。

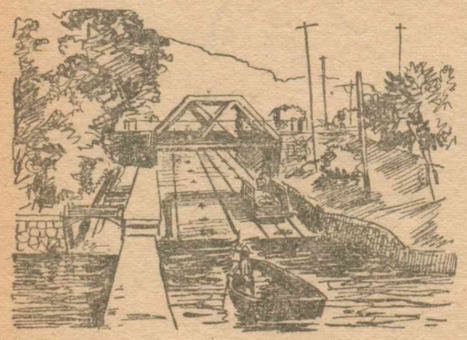
むかし、廣い海の上を長いあいだかかって旅行することは、たいへんくるしいしごとでしたが、海岸づたいに、船でゆききをしたり、川にそって船を進めたりするのは、それほどでもありませんでした。そのうえ、たくさんの重い荷物をはこぶのには、船を使うほうが、ずっとらくでした。ですから、むかしから、米や、そのほかの品物を遠くまではこぶときには、さかんに船が利用されました。

ことに、武士の世の中になって、商業もさかんになってくると、いろいろな土地でつくられる物を賣ったり買ったりするこ

とがさかんになります。船は、それをはこぶためになくてはならないものでした。港には、荷物をあずかるくらもたち、商人もたくさんあつまって、そのあたりは、たいへんにぎやかな町になりました。

また外國とゆききをすることがとめられてからは、あちらこちらの大名たちは、船が通りやすいように川をつくりなおしたり、港を大きくしたり、ときには、新しく川をほったりして、船が陸地のなかにまではいってきて、つみおろしがべんりになるように、いろいろとくふうしました。

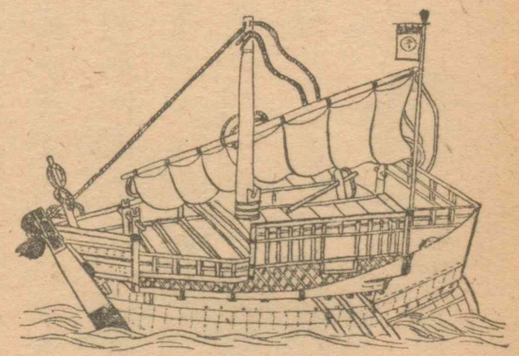
今では、川をのぼりくだりしている船



今、京都のふきんにあるうんが

はあまりみかけませんが、むかしは、ずいぶん川を通る船が多かったものです。米のよくとれる土地などでは、川の出口にある港が、川上の方からはこばれてきた米を、どんどんつみだし、遠くに送ったりしたので、したいにさかえるようになりました。

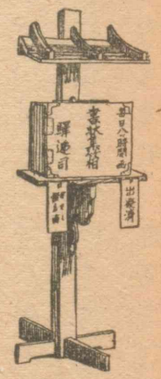
江戸と大阪とのあいだは、船のゆききも、とくにさかんでした。そこで、十いくつかのろをもち、米を千石もつむことのできる大きな船もつくられるようになりました。



江戸時代に江戸と大阪のあいだで、荷物をはこぶのに、武士や商人たちにさかんに使われた船です。

むかしは、手紙をどういうふうにしてはこんだか

今では、ポストにさえいれれば、遠くに住んでいる人々のところへでも、かんたんに手紙をとどけることができます。いそぐときには、電ぽうをうったり、電話をかけたりして、用事をすますこともできます。そればかりでなく、ラジオをきいたり、新聞をよんだりしていれば、家のなかにすわったままで、日本はもちろんのこと、世界のいろいろな國のできごとまで知ることができます。また、本をよめば、むかしの人のことも、遠い國に住んでいる人々のくらしのありさまも、くわしく知ることができます。



しかし、こんなに、べんりな世の中になったのは、明治の新しい世の中になってからのことでした。それまでは、遠くの人に用事をつたえたり、廣い世の中のことを知ったりするのは、たいへんこんなんなことでした。

大むかし、人々が、まだあちらこちらに、ぽつぽつと住んでいたときには、遠くはなれた人々がおたがいにゆききすることも、めったにありませんでしたし、また、用事をつたえあうひつようもありませんでした。

しかし、世の中がすすんで、なにかにつけて、ほかの人々とたすけあってくらしていかなければならなくなると、おたがいにゆききしあって、自分の用事をほかの人々につたえることが

ひつようになってきます。そして、このことは、世の中がすすめば、すすむほど、ますますたいせつなことになってくるのです。

けれども、人々が、まだもじを使うことを知らなかったころには、つたえたいことがあっても、自分でたずねていくか、それとも、だれかにたのんでつたえてもらうほかに方法がありませんでした。ですから、もし、自分でいくこともできないし、たのんでつたえてもらえるような人もみあたらなかったら、それこそたいへんこまったにちがいありません。

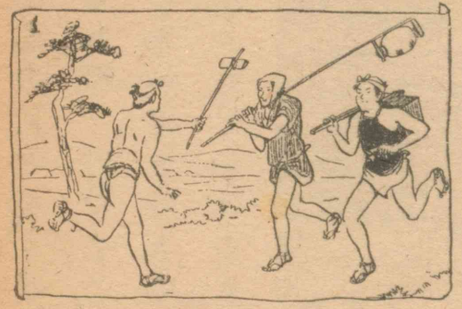
人々が、もじをかくようになってからは、ぜひ話したいということができても、手紙にかけば、いちいちでかけないでも、あいてに用事をつたえることができるようになりました。ただ、

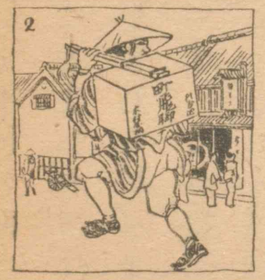
とどける方法は、たのまれた人が歩いてはこぶか、ときには、うまにのってはこぶかするのがふつうだったのです。

今から、千三百年ぐらいまえ、奈良のみやこと遠いいなかとのあいだのゆききをべんりにするために、道路がつくられました。そして、そのとちゅうのところどころに駅をつくって、うまの用意をすることになりました。これはそのころ中國でやっていた方法をとりいれたのです。こうして、たいせつな國の用事のしらせや身分の高い人の手紙は、遠くの地方まで、どんどんとどけられるようになりました。そのうちに、武士の世の中になると、ひきゃくといって、手紙をせんもんにはこぶ人もでてきます。しかし、ひきゃくを使うことのできたのは、やはり身分の高い人々や、武士たちだけで、ふつうの人々にはできな

いことでした。

しかし、商業が、だんだんとさかんになって、人々のゆききもはげしくなってくると、遠くにはなれて住んでいる人々と手紙のやりとりをすることが、ますますひつようになってきました。

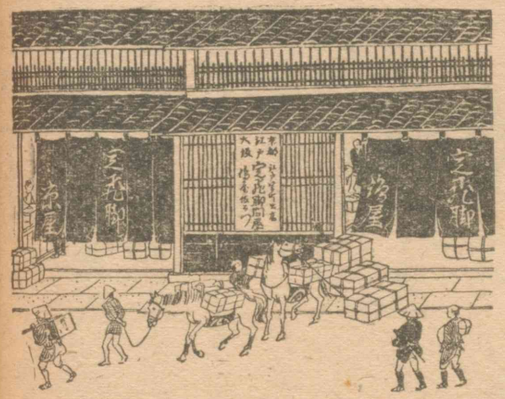




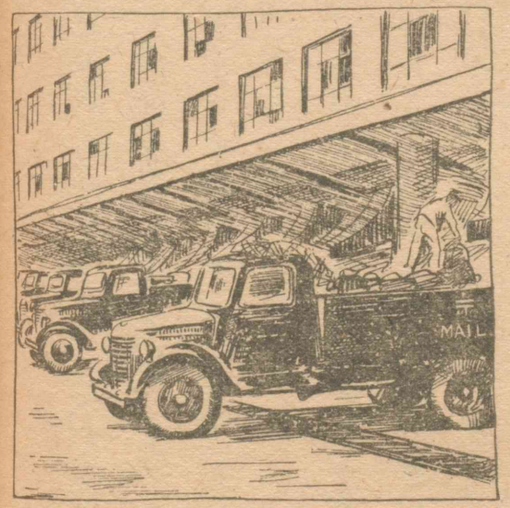
1. しょうぐんの手紙をはこぶ"つぎひきゃく"とよばれる人
2. ふつうの人々の手紙をはこぶ町びきゃく

しょうぐんが江戸にいて、日本じゅうをおさめていたころ、大名たちは、それぞれ、自分のひきゃくをもっていて、自分たちのいそぎの用事をつたえていましたが、それとともに、いつ

ばんの人々も、同じように、ひきゃくを使うようになりました。それは、町びきゃくとよばれて、まい月三かい、大阪と江戸とのあいだをゆききしましたが、日かずは、ふつう六日ぐらいかかったということです。これは、はじめ、江戸・京都・大阪の



江戸時代のひきやくやの店のありさま。ちょうど馬に荷物をつんではこんでいくところです。



これは、今のゆうびんきよくのありさまです。トラックがではいりして、荷物をはこんでいます。

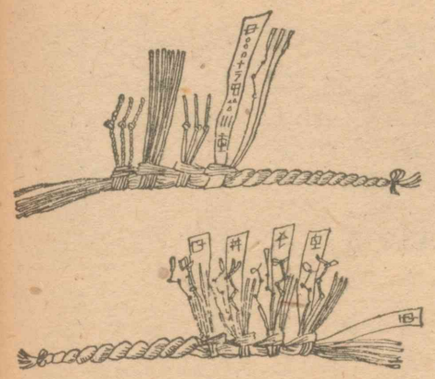
あいだにだけできたのですが、しだいに、日本國じゅうにひろがっていきました。

たとえば、江戸に住んでいる人が手紙をだそうと思うときは、手紙におかねをむすびつけて、きまった場所においてあった大きなかますに入れておきました。まいにち、夕がたになると、ひきゃくがそれをあつめて、あてなの土地にとどけてくれます。とどけられた町では、ひきゃくやのまえに、ずらりとならべておいて、心あたりの人が受けとるのを待っていました。明治の新しい世の中になるまで、日本では、だいたいこんなふうにして、手紙をだしたり、受けとったりしていたのです。

もじは、どのようにしてできたのでしょうか

大むかしの人々は、ことばは使っていたので、話しあうこと

にはこまりませんでしたが、もじを使うことを知らなかったので、たいへんふべんでした。たいせつなことがらも、かきとめておくことができないので、すぐわすれてしまいます。せっかくよいことを思いついても、わすれてしまうことが、しばしばあったのです。



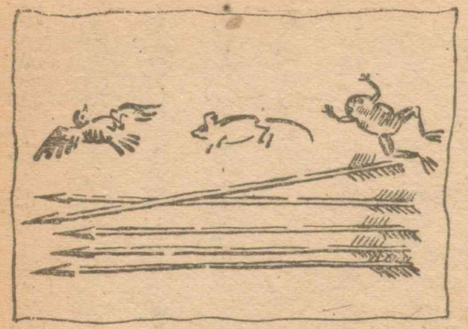
これは、沖縄(おきなわ)の人々がむかし使っていたといわれているなわのもじです。なわをこのようにいろいろくみあわせて、思いだす手がかりにしていたのです。

そこで、人々は、わすれたときにも思いだすことのできるように、なにかたすけになるものをつくりたいと考えました。そこでひもやなわをいろいろなふうにむすび、とくべつなかたちをつくったり、木にきざみめを

つけたりして、思いだすときのたすけにしていました。今でも、もじを知らない人々のうちには、こんな方法を使っている人もいるということです。

それに、もうひとつ、たいへんふべんなことがありました。

それは、まえにもお話ししたように、遠くはなれている人々のところに、なにかを知らせたいと思うときです。とくに、ほかの人に知られたくないことは、どうしても自分でいって話さなければなりませんでした。けれどもそのうちに、人々は、絵やいろいろなしるしをかいて、それをいろいろに

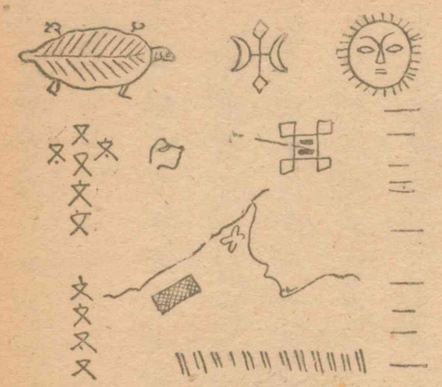


外國の大むかしの人々が、てきに送った絵の手紙です。"とり・ねずみ・かえるのようなまねができないならば、われわれと、いくさをしなければならぬ。そのとき、きっと、矢でいころしてやる"といういみだということです。

くみあわせ、あいてにそのいみをわからせるという方法を考えだしました。しかし、絵やしるしで、用事をわからせようとするのは、なかなかむずかしいことです。くわしいことはかけなかったでしょうし、よむほうで、まちがうことも多かったことでしょう。

けれども、人々は、こうして絵で手紙をかいているうちに、たいそうかわったもじをつくりました。それは、絵のもじです。人間がはじめてつくったもじは、このような絵もじだといわれています。ヨーロッパでも、中國でも、さいしょにつくられたもじは、みんな絵もじやいろいろのしるしのもじでした。

絵もじは、このように、今から、ずいぶんむかしにできたものですが、アメリカに住んでいるインディアンなどは、わずか

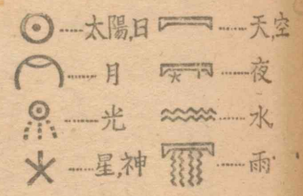


インディアンの絵もじ

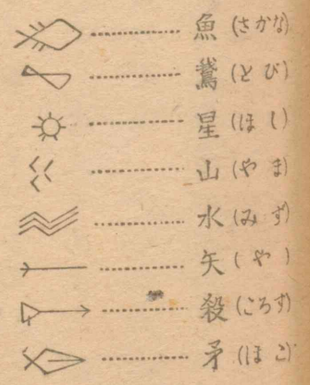
アメリカに住んでいたインディアンが今から190年ぐらいまえに、そのころアメリカに住んでいたイギリス人をおそって、たたかいにかったときのことを、かいた絵もじです。どういういみなのかわかりますか。

たいようの下にあるよこせんは、六日かんと四日かんの二かい、せめよせたということです。まんなかの二本のせんは川で、そのうえは、イギリスのおしろをせめたということです。左のほうにあるのは、てきのころされたものが六人。ほりょになったものが四人といういみだといわれています。下のほうのななめのせんは、たたかいにいった23人のへいたいで、絵の左の上にあるかめは、「がいせんした」ということだろうといわれています。

エジプトの絵もじ



メソポタミヤの絵もじ



かんじのおこり

二百年ぐらいまえにも、こんなもじを使っていたということです。

かんじとかな

中國では、はじめにつくられた絵もじが、長いあいだ使われているうちに、だんだんかたちがととのい、もじらしいものになっていきました。そして、「かん」という國のころには、今私たちが使っているのと、ほとんどかわらないかんじがつくられるようになりました。そして、そのかんじが、まだもじを知らなかった日本の大むかしの人々のあいだにつたわったのです。

そのころ日本の人々には、そせんのいさましいてがらばなしや、そのほか、いろいろのものがたりがたくさんつたわっていました。そして、まだもじがなかったころには、とくべつにも

のおぼえのよい人が、それをいちいちあんきしていたのでした。かりのあと、かちいくさのあと、おまつりの夜などには、そのようなものがたりが、ひとばんじゅう、話しつづけられたということです。

しかし、もじというべんりなものがつたわってくると、人々は、すぐもじを使って、そのようなものがたりをかきあらわしはじめました。そして、しだいに歴史や地理の本や、そのほかさまざまな本がかきのこされるようになりました。

しかし、かんじをおぼえても、それだけですぐに、日本のことばがすらすらとかけたわけではありません。かんじはもともと、中國のことばをかきあらわすためにつくられたものですから、日本のことばには、なかなかうまくあてはまりません。で

すから、人々はだんだんかんじを使うことになれてくると、かんじをうまく使って、日本のことばをそのままあらわそうと、くふうするようになりました。そして、かんじだけでたりないところは、新しいもじをつくっておぎなおうと考えました。私たちが、今かんじといっしょに使っているかなは、このような苦心のあげくにつくられたものです。

な（安から）あ　お　あ　あ
が（以から）い　い　い　い
ら（知から）ち　ち　ち　ち
ひ（奈から）ふ　ふ　ふ　ふ　な　な
な（阿の下から）ト　ロ　ロ　ア　ア　ア　ア　ア
か（伊の イから）イ　イ　イ　イ
た（江から）エ　エ　エ　エ
か（加から）カ　カ　カ　カ　カ

かなのうちで、かんじをかんたんにかいてつくったものが「ひらがな」、一部分をとってこしらえたものが、「かたかな」です。

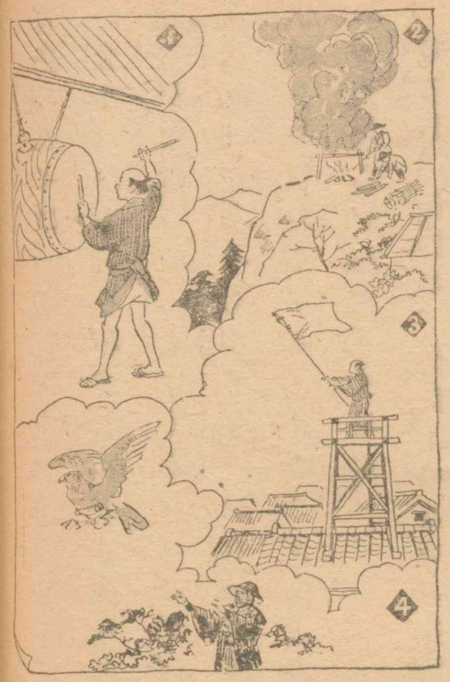
こうして、かなができてから、

日本の人々は、話したり、きいたりすることばを、すっかりそのまま、かきあらわすことができるようになりました。そのうえ、かなは、かんじにくらべてかずがすくなく、おぼえるのにも、たいそうべんりです。かなができてから、本をよんだり、手紙をかいたりすることのできる人のかずも、どんどんふえていったにちがいありません。

のろし、たいこ、はた―いろいろな通信の方法―

どんなにいそいで走っても、また、うまがどんなにはやく走っても、今の世の中にある電ぽうや電話のように、すぐに、用事を知らせるというわけにはいきません。しかし、むかしの人人も、いくさのとき、てきがせめよせてきたりしたときなど、なんとかして、はやく知らせたいと思ったことでしょう。

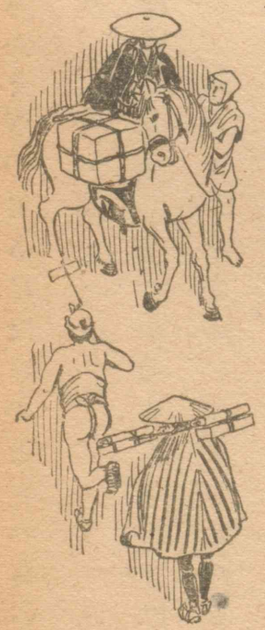
むかしの人は、そのようないそぎのときには、のろしやたいこやはたなどを、あいずとして使うことが多かったのです。あいずは、のろしのけむりがあがったら、「てきがせめてきた。」はたをふったら、「ここはきけんだ。」たいこをつづけてならしたら、「いそいでおしろにあつまれ。」というように、まえからきめておきました。もちろん、のろしやたいこやはたのあいずは、いくさのときばかりでなく、ふだんにも、いろい



1, たいこであいずする。2, けむりをあげてあいずする。3, やぐらからはたをふる。4, たかをとばして手紙をはこぶ。

ろに使われていたことでしょう。

しかし、あまり遠くはなれたところでは、たいこやのろしの音をきくことも、はたやけむりをみることも、たいへんむずかしくなります。ですから、せっかくのろしや、たいこや、はたを使っても、遠くはなれたところにあいずする役にはたたないわけです。外國でも、むかしは、この方法を使っていたようですが、ふべんなことが多いので、はとをならして、手紙をはこばせるという方法を使った人々もありました。日本では、はとを使った人はありませんが、よくかいならした、たかを使った人々があったということです。



四、どんなふうにして、今のようにべんりな世の中になったか。

外國とのゆきき

今まで、なんどもお話ししたように、人々は、はじめ、あちらこちらの土地に、すこしずつばらばらにわかれて住み、くらしにひつようなものは、たいてい、自分たちでつくっていました。ですから、ほかの土地の人々とゆききすることも、あまりありませんでした。

しかし、そのうちに、人々は、しだいに、もっとほかの土地とゆききして、おたがいに、たりないものをもらいあったり、

べんりなくらしのしかたをならったりしたら、もっとよい生活ができる、ということに氣がついてきました。

そして、このことは、世界のどこの國の人々もおなじでした。はじめのうちは、近くの土地に住む人々のあいだだけで、ゆききをしていましたが、そのうち、もっと遠い土地の人々とも、ゆききをするようになってきました。そして、大きい海をこえたむこうの土地の人々、高い山のむこうがわに住む人々、廣いさばくのあちらに住んでいる人などともゆききして、くらしにどうしてもひつようなものや、めずらしいもの、べんりな道具などを手にいれたり、ゆたかなくらしのしかたをならったりするようになりました。

このように、人々は、自分たちのくらしを、ゆたかでべんり

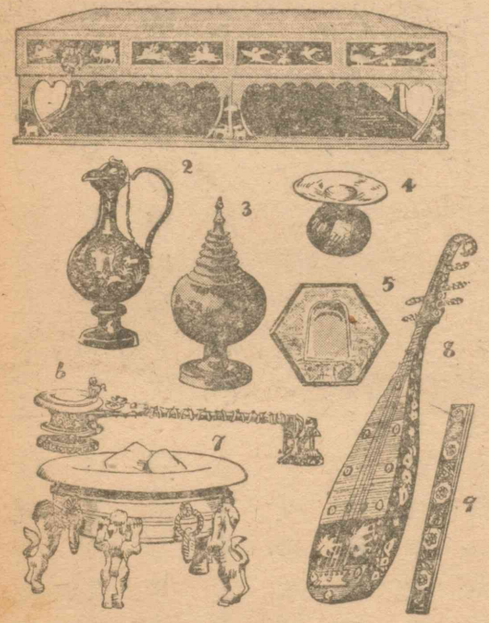
港にいる船とにぎわう町の人々

なものにするために、すすんでほかの國々の人ともゆききをするようになったのです。

もうあなたがたが、知っているように、日本の人々は、ずっと大むかしから、大陸の人々とゆききをしていました。はじめ、石や木の道具や、かんたんなはたけしごとしか知らなかった人々が、金ぞくの道具や、お米をつくる新しい農業の方法を知るようになったのも、大陸の人々とゆききをするようになってからのことです。

そののち、大陸とのゆききがますますさかんになるにつれて、

かいこをかうこと、はたをおること、家をたてたり道具をつくったりすること、さけをつくること、かわらをつくることなどのすすんだ方法や、そのほか、もじをはじめとして、いろいろな学問や佛教などが、つぎつぎに大陸からはいってきました。



今から1200年ぐらいまえにつくられた奈良の正倉院というたてものには、そのころの身分の高い人々の使ったりっぱな道具がのこされています。それは、からだにつけるかざりや家具・しょっき・びわやことなどの樂器・刀・おりもの・ふでやすみなど、今、私たちがみてもおどろくほど美しいものばかりです。

この絵にあるのは、

(1)，ごばん (2)，と (3)，は水をいれるびん (4)，ガラスのつぼ (5)，すずり (6)，しゃくのかたちをしたこうろ(7)，火ばち(8)，びわ (9)，物さし

こうして、日本の人々の生活は、しだいに中國におとらぬくらいべんりな、ゆたかなものになっていきました。

武士の世の中になって、商業がすこしずつさかんになってくると、しだいに商人が活やくするようになってきます。なかには、すすんで外國とゆききをする人々もでてきました。それらの人々は、日本のなかでも、大陸に近い西の方に住んでいる大名たちや、いちぶのとくべつな商人たちでした。大陸の人々とゆききして、商賣をすれば、たいへん大きなもうけがあったからです。

このようにして、船も大きなものがつくられるようになり、港もだんだんりっぱなものができてきました。そして、中國や朝鮮の人々とゆききするばかりでなく、南の遠い土地の人々の

ところにも、はるばるでかけるようになりました。

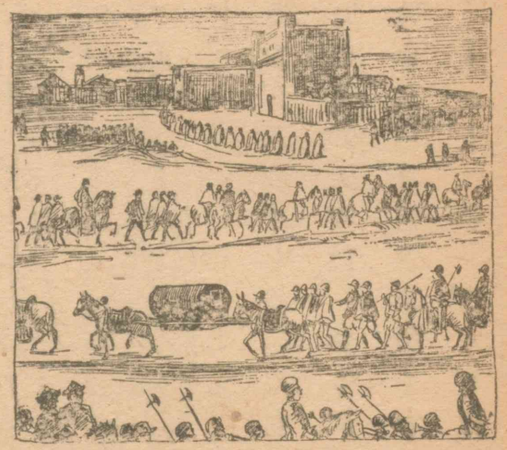
しかし、そればかりでなく、そのうちに、ヨーロッパ人が、遠い海のむこうから日本にくるようになりました。

それは、今から四百年ぐらいまえのことで、はじめにきたのは、ポルトガル人でした。それにつづいて、イスパニヤ人やオランダ人やイギリス人なども、やってくるようになりました。

これらの人々は、おもに、ぼうえきをするためにきたのですが、なかにはキリスト教をひろめるためにきた人々もありました。

しかし、いっぽうでは、日本人のなかにも、すすんで遠い外

ヨーロッパの人々が、日本にきたときのありさまです。



九州の大名からつかわされた少年たちが、はるばるローマにいったとき、たいへんかんげいされました。この絵は、そのときのありさまです。

國までかけようとする人々が、どんどんふえてきました。なかには、はるばる、ヨーロッパのローマまで使いにいった十五、六さいの少年もあったほどです。

このように、日本の人々も、遠い海に船をのりだして、世界の人々とゆききをすることができるようになったのでしたが、ざんねんなことに、しばらくすると、そのころのしょうぐんのめいれいで、外國にでかけることがとめられてしまいました。外國人も、オランダと中國の商人のほかは、日本にくることを

とめられてしまいました。

こうして、日本は、世界の國々とはなれて、ひとりぼっちになってしまいました。このために、外國の人々のくらしが、どんどんべんりになっていくようすも、あまり知ることができませんでした。

このようなひとりぼっちのありさまが、二百年あまりつづきました。しかし、今から八十年ぐらいまえに、武士の世の中がおわって、新しい明治の世の中になると、だれでも思うように外國へいくことができるようになりました。外國とのゆききも、明治になるすこしまえから、すこしずつはじまっていましたが、明治になってから、きゅうにさかんになりました。日本の人々が知らないでいるあいだに、外國では、いろいろな発明や発見

があって、人々のくらしは、たいへんべんりになっていました し、学問なども、ずっとすすんでいました。そのことがわかると、日本の人々はたいへんおどろいて、大いそぎで、そのべんりなくらしのしかたや、すすんだ学問などを、とりいれようとしました。

それでは、明治になってから、世の中は、どんなふうにべんりになってきたでしょうか。

新しい政治

長いあいだつづいた武士の世の中では、武士が、いちばん身分の高い人だときめられていました。武士のつぎには、農業をする人、それから、だいくなどのしょくにん、さいごが商人というじゅんじょでした。しかも、農家に生まれた人や、しょく

にんや商人の子は、どんなにほねをおっても、めったに武士になれませんでした。人々はみんな、自分の生まれた家のだいたいのしごとを、おやから受けついでいくようにきめられていたのです。

そのころ、江戸とよばれていた今の東京に、大名のかしらがいて、日本國じゅうをおさめていました。しょうぐんというのは、このかしらのことで、日本の國をいくつにも分けて、そこに、けらいの大名たちをおき、それぞれその土地をおさめさせていました。そして、その大名の下には、またけらいの武士がつかえていました。

どの村にも、なぬしとか、しょうやとかよばれる人がいて、大名のめいれいを人々につたえたり、ぜいをあつめたり、その

ほか、いろいろなとりしまりやせわをしていました。なぬしやしょうやは、さむらいではありませんでしたが、やはり、だいたい、それになる家がきまっていて、だれでもなれるというものではありませんでした。

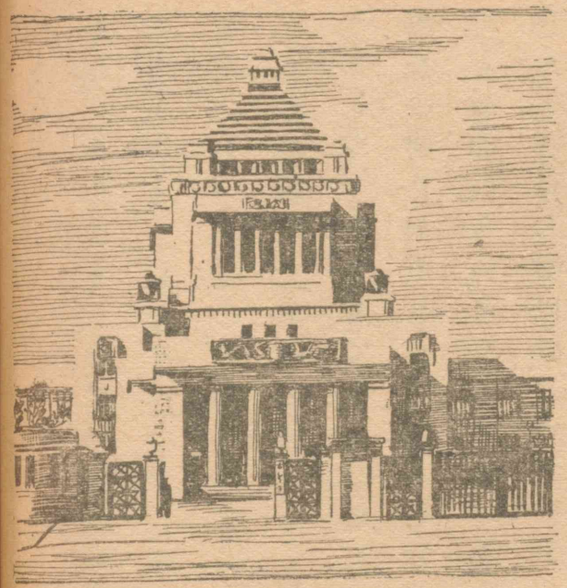
あなたがたが大きくなっても、もし武士の世の中のように、おとうさんのしごと以外のことをしてはいけない、ときめられたらどう考えますか。ずいぶんきゅうくつだと思うでしょう。明治の新しい世の中になって、政治のしかたがすっかりかわると、こんなわけのわからない、ふべんなきまりは、どんどんやめられるようになりました。そして、どんな家に生まれた人々でも、思うようにすきなことがやれるようになりました。

武士というとくべつな身分もなくなりました。長い刀をこし

にさしていばっていた武士は、もうどこにもみられなくなりました。これまで、身分の高い人のほかは、もつことのできなかった、みょうじ（せい）も、だれがつけてもよいことになりました。しょうぐんや大名はなくなって、新しい政府ができ、たくさんの縣がもうけられて、それぞれ役人がおさめることになりました。町や村でも、なぬしやしょうやのかわりに、新しく町長や村長ができました。そして、みんなでえらんだ人々が、町や村のいろいろなことを、そうだんしてきめるようになりました。日本の國にはじめてぎかいができ、いっぱんの人々の考えが政治にとりいれられるようになったのは、明治二十三年のことです。

しかし、このように新しいすすんだ政治がおこなわれるよう

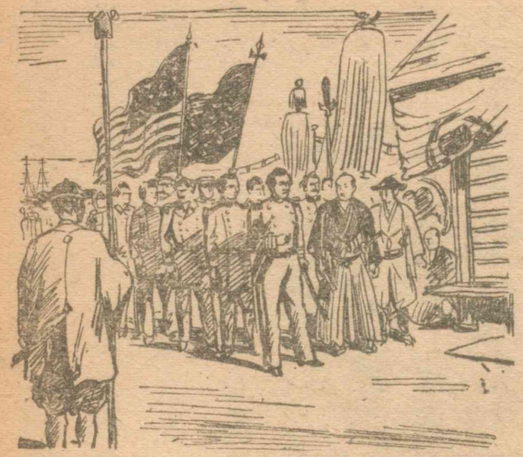
になっても、人々の生活がすぐよくなるというわけにはいきませんでした。どんな人たちでも、ゆたかでべんりな生活ができるというようには、なかなかなりませんでした。なんかいも、せんそうがあって、そのたびに、ふしあわせな人もできました。また、いくら働いても、びんぼうで、たのしくくらすことのできない人もたくさんありました。



これは、國会ぎじどうです。ここで、せんきょでえらばれたぎいんたちが、いろいろと政治のそうだんをするのです。

それで、明治になってはじめられた新しい政治

のしかたを、もっとよいものにしていくこともひつようになってきたのです。こんど新しくつくられた憲法では、人々の生活を、今までより、もっと自由でしあわせなものにするために、いろいろなきまりがつくられています。



ペリーが日本にきたときのありさま

新しい生活

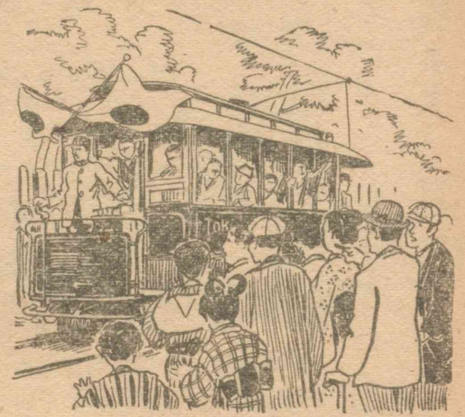
まえにもお話ししたように、今から、百年ほどまえに、はじめて、アメリカのぐんかんが四せき、ペリーという人にひきいられて、今の横須賀市の浦賀のおきにきたときには、人々のおどろきはたいへんなものでした。これまでにみた

こともない大きな船が、けむりをはいて走るありさまは、きっとおそろしいかいぶつのようにみえたことでしょう。

明治の世の中になって、世界の國々と自由にゆききできるようになると、いろいろなめずらしいもの、べんりなものが、どしどし日本の國にはいってきました。

これまで、遠い土地へ、いそぎの用事をつたえようとすると、ひきゃくを大いそぎで走らせたり、うまをとばしたりして、それでもなんにちもかかりました。それが、電信というべんりなものができると、わずか二本の電線をひいておくだけで、すぐむこうに通じるようになりました。ですから、それをみておどろいた人々は、電信のことを、はりがねだよりとよび、電線には、人の血がぬってあるのだといって、まるでまほうのように、

こわがったということです。

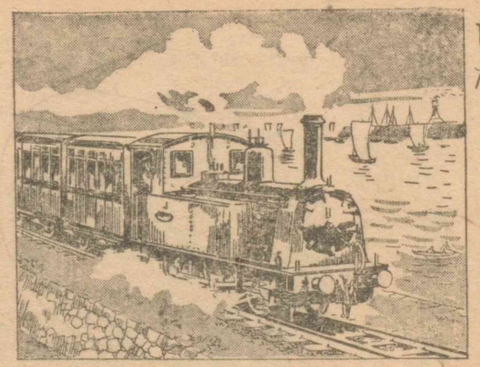


はじめて電車が走ったとき、人々のおどろいているありさま

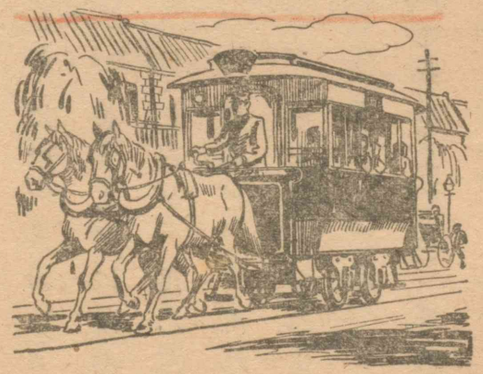
はじめて、こんなべんりなきかいをみて、おどろいた人々のなかには、さいしょそれをこわがって、使うことにはんたいする人もいましたが、だんだんなれてくると、こんどは、だれもがすすんで、それをとりいれようとしました。

人々が、さいしょおかじょうきとよんで、めずらしがった汽車は、明治五年にはじめて動きました。そのときは、東京と横浜のあいだを通っただけでしたが、それから三十五、六年もたつと、日本のはしからはしまで、鉄道が通じて、北は青森から、

南は鹿児島まで、汽車にのっていくことができるようになりました。



明治五年に横浜と東京とのあいだに使われたいちばんはじめの汽車です。



鉄道馬車

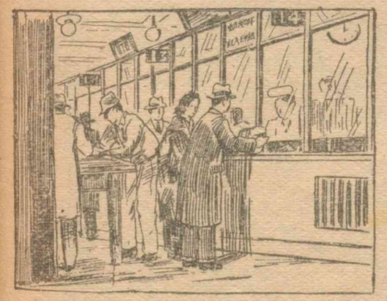
そのほか、のりものとしては、かごのかわりに、馬車や人力車が使われるようになり、とかいは、こういうのりもののゆききでにぎわいました。また鉄道馬車といって、レールの上を、二頭のうまがひいて走るものもあらわれました。しかし、そのうち外國から電車や自動車がはいってくると、鉄道馬

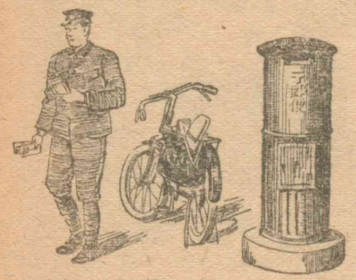
明治の世の中のごくはじめのころの人々のありさまです。

車もなくなり、ふつうの馬車や人力車も、あまり使われなくなりました。

電信は、汽車ができるよりまえの、明治二年から通じるようになりました。それも、はじめのうちは、汽車と同じように、東京と横浜とのあいだだけでしたが、それから十年もたつと、日本の國のおもなところには、どこへでも通じるようになりました。

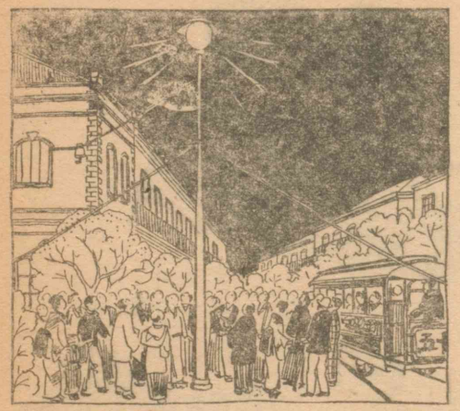
人々は、このようなべんりなきかいばかりでなく、外國のすすんだ生活のしかたも、どんどんとりいれました。洋服は、





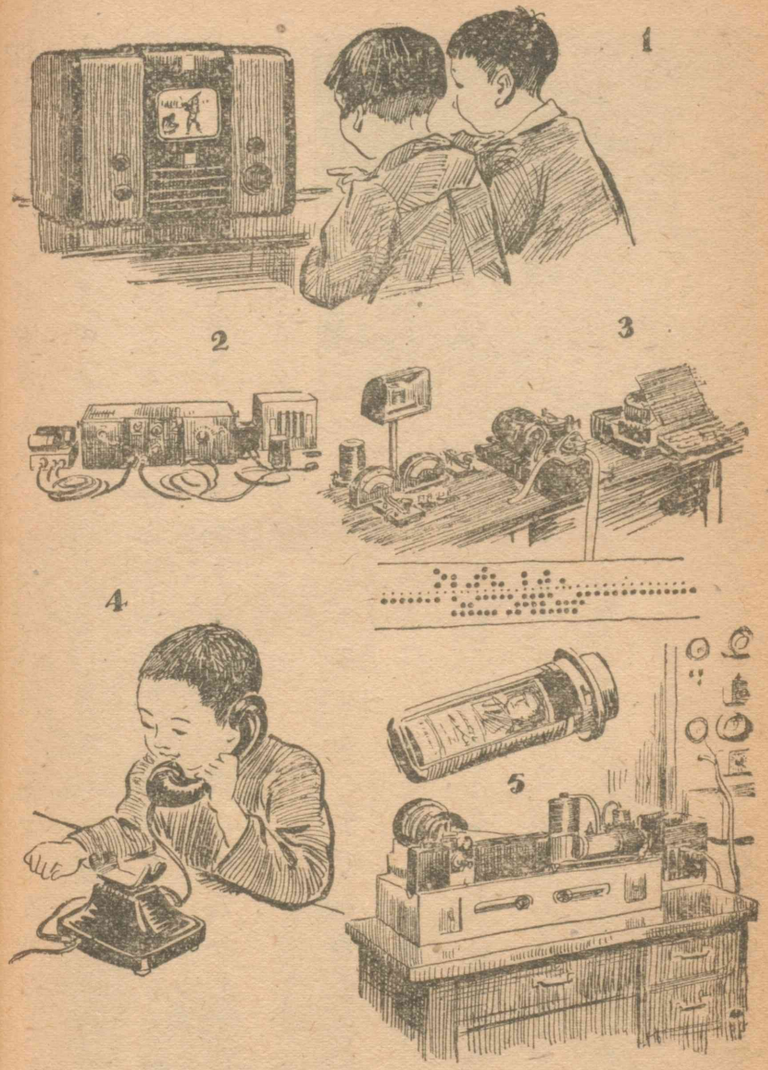
今のゆうびんきょくとポスト

はじめは、政府の役人や、いちぶの人々しかきませんでしたが、しだいにきる人がふえていきます。西洋ふうのたてものも、だんだんできていきます。西洋りょうりをたべることもさかんになったので、これまで日本の人々がたべなかったうしのにくも、しだいにたべるようになりました。



はじめて、銀座に電とうがついたとき、人々がみてたいへんめずらしがったありさま

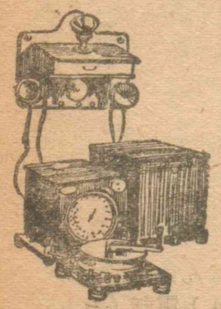
また、これまであかりといえば、おもに、ろうそくやあんどんでしたが、明治になると、まず外國で使われていたガスとうがとりいれられ、そのうちしだいに、石油ランプがひろまってきました。あかるい電とうが、はじめて、東京の



(1),テレビジョン (2),ぎょぎょうに使うむせん電信 (3),ゆうびんきょくなどで使っているむせん電信 (4),電話 (5),電氣の力で写真を送るきかい

銀座どおりにともるようになったのは、明治十五年のことでした。アメリカで電とうが発明されてから、わずか五年ののちのことです。このころの人々が、外國のべんりなものを、どんなに大いそぎでとりいれようとしていたか、よくわかるではありませんか。それから十年もたつと、いっぱんの人たちの家でも、ガスとうや、ランプのかわりに、電とうをつけることができるようになりました。

こんなべんりなものや、すすんだ生活のしかたは、はじめのうちは、おもにとかいの人々や、おかねもちだけがとりいれていたのでしたが、そのうちしだいに、いっぱんの人々のあいだにもとりいれられるようになってきました。

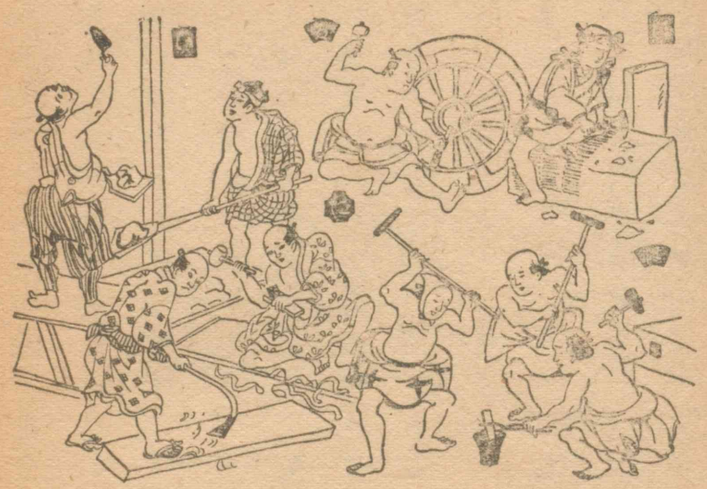


大きな工場

まえに商業のところでお話ししたように、大むかしの人々は、ひつようなな道具は、めいめい、自分でつくっていました。しかし、そのうちに、道具つくりをせんもんのしごとにする人々もでてきました。

はじめのうちは、そのようなしょくにんたちも、身分の高いくげたちや、寺や神社にやとわれて、そこで、主人たちのためにひつようなものをつくっていたのでした。

しかし、商業がだんだんさかんになり、人々がいろいろな品物をほしがるようになると、しょくにんたちは、こんどは、主人以外のいっぱんの人々のちゅうもんも受けて、道具をつくり、廣く賣りだすようになりました。しょくにんたちは、そうすれ



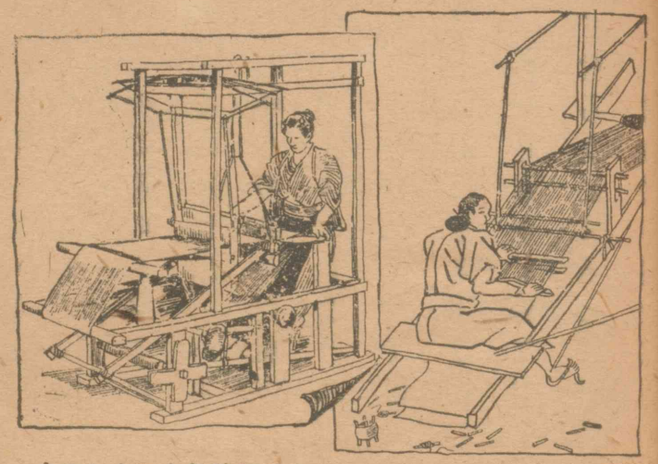
むかしのしょくにん (イ)、さかんや (ロ)、車をつくる人 (ハ)、石や (ニ)、大工 (ホ)、かじや、などです。

ば、たいへんもうけが多く、じゅうぶんにくらしをたてていくことができることを知ったからです。そうなると、しょくにんたちは、今までつかえていた主人からはなれて、自分たちのなかまだけでくみあいをつくり、しごとをしていくようになりました。そして、世の中がべんりになっていけばいくほど、しょくにんのがずもますますふえていきました。はじめ、しょくにんたち

がつくっていたのは、身分の高い人々や大名や、おかねのある商人たちが使う美しいさいくものや、おりもの・刀・かぶとなどが多かったようです。

ところが、江戸にしょうぐんがいて、日本じゅうの大名にさしずをする世の中になると、大名たちは、自分のおさめている領地をほかの大名の領地にまけないようにゆたかにするために、自分のところだけにできるめずらしいもの、みごとなものをほかの土地の人々に賣ることを考えました。そこで、日本の國のあちらこちらに、りっぱなうつわ・おりもの・せとものなどをつくるたくさんのしょくにんが、どんどんできてきました。

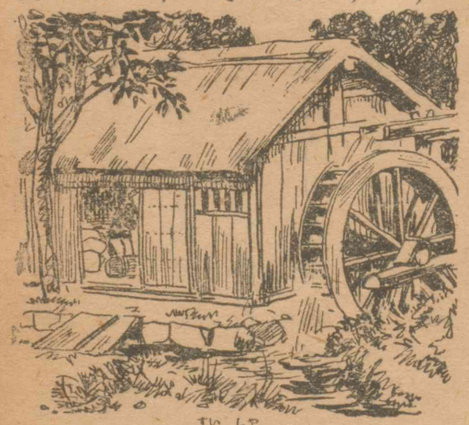
あなたがたの住んでいる町や村に、むかしからつくられてきたゆうめいな品物はありませんか。



ぬのをおるむかしの人々

今のかんたんなはたおりのきかい

このころの物のつくりかたは、たいへんてがるでした。あなたがたの住んでいる町や村には、自分の家のなかにかんたんなしごとばをこしらえたり、きかいをそなえつけたりして、うちの人たちだけで物をつくっているところはありませんか。また工場といっても、手や足で動かすかん



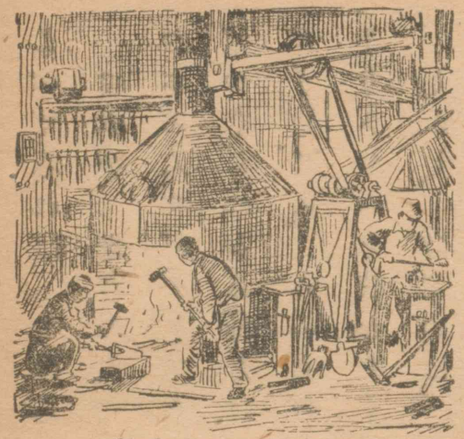
村の水車(すいしゃ)ごや

たんなきかいだけをすえつけた小さいものはないでしょうか。ちょうどこういうところでやっているようなてがるな方法で、このころの人々はいろいろな物をつくっていました。

このころのしょくにんは、いちにんまえになってひとりだちをするためには、いろいろと苦労しなければなりませんでした。なん年ものあいだ親方について、りっぱなうでまえになるようにしゅぎょうしなければならなかったのです。もちろん、今でも、しごとによっては、こんなふうにして、いちにんまえのしょくにんになるようにしこまれる人々もいます。

むかしも今とおなじように、すこしたくさんの品物をつくって賣ろうとすると、材料を買ったり、工場をつくったりするのに、なかなかもとでがいりました。品物をつくって賣りたいと

思っても、おかねがなくてできないしょくにんもありました。それで、商人やたくさんの土地をもったおかねもちが工場をつくり、しょくにんをやとって、物をつくらせるということもだんだんにおこなわれるようになりました。



農具をつくる工場

新しい明治の世の中になると、西洋の國々のすすんだ工業のやりかたや、べんりなきかいが、はいってくるようになりました。人間の手や足のかわりに、きかいを使えば、なんばいも、なんじゅうばいも、早く物をつくることができます。あなたがたの村や町にある大きな工場と、むかしのままの小さな工場をく

らべてみれば、そのちがいがはっきりわかると思います。

日本が、世界の人々とどんどんこうさいするようになると、日本の人々ばかりでなく、世界のたくさんの人々もまた、日本でつくられる品物をほしがるようになりました。そうなると、どうしても、いいものをたくさんつくるために、すすんだべんりなきかいを使わなくてはなりません。

しかし、はじめは、いっぱんの人々は、やはり、むかしのままの方法をつづけていて、なかなか新しい方法をとりいれることはできませんでした。それで、はじめのうちは、政府が、外國からきかいを買いいれて、大きな工場をつくり、すぐれたぎしを外國からよんで、しどうしてもらいました。

こうして、まず、政府でつくった工場や鉱山が、たくさんで

てきました。そして、そのうちに、いっぱんの人々のなかでも、おかねのある人々は、そのまねをして、新しい工場をつくるようになっていきました。

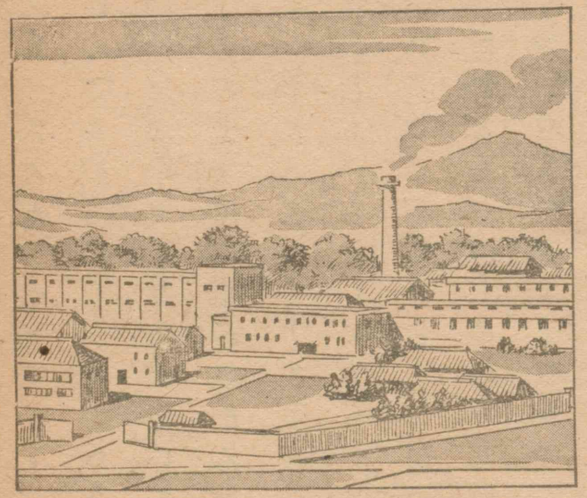
はじめは、きかいといっても、じょうきの力でうごかすものが多かったようです。いろいろな工業のうち、まず、いとやおりものをつくるしごとがさかんになっていきました。かいこのまゆからいとをとることは、いなかでは、明治の世の中になるまえから、さかんにやられたことでしたが、こんどは、それをきかいの力で、どしどしつくるようになりました。

おりものの材料になるわたも、武士の世の中では、わたのみをつくることからやっていましたが、明治の世の中になって、外國とゆききをするようになると、よいわたがいくらでも手に

いとをつくる工場のなか

はいるようになったので、日本で、わたをつくるかわりに、外國から買いいれて、つくるほうがべんりになりました。こんなわけで、まえからやっていたいとの工場が、たいへんさかんになっていきました。今から五十年ぐらいまえは、日本の工場のうち、半分以上は、いとやおりものをつくる工場だったということです。

もちろん、そのほかにも、どしどし新しい工業がおこってきました。それに、水の力を利用して、電氣をおこし、それで、



大きな工場

きかいを動かすことができるようになると、今までよりもずっと大きな工場が、たくさんできてきました。そして、きかいや船やきかんしゃなどをつくるしごとが、たいへんさかんになっていきました。こういう大きな工場は、交通のべんりな町にたてられるものが多かったようです。

こうして、工場のできた町が、どんどん大きくなっていったばかりでなく、新しい町も、おこってきました。工業の町です。大きな工場がたつと、そのまわ

りに、人々があつまるので、いなかの村から、大きな町になつたところが、たくさんできました。あなたがたの村や町の近くには、このような町がないでしょうか。

このように工業がさかんになつてくると、たくさんの品物を、安いねだんでつくりだしていくことができます。そのために、私たちも、むかしにくらべて、いろいろなものを、らくに手にいれることができるようになつてきました。

けれども、はじめのうちは、工場にそなえられたきかいにもりつぱなものがすくなかつたうえに、たてもののなかもくらく、そこで働く人々のためのせつびもととのつていませんでした。明治のころにくらべると、今は、工場のなかもあかるく、せいけつで、働く人々のためのびょういんなど、いろいろなせつび

をしてあるところもふえてきて、よほどよくなつてきていますが、まだまだ、じゅうぶんとはいえません。

農業のうつりかわり

武士の世の中でも、江戸にしょうぐんがいるころになると、農業がたいへんすすんできて、新しい土地がかいこんされ、新しい村がたくさんできたということは、まえにもうお話ししました。

明治の世の中になつて、政治のしかたもかわり、すすんだ学問を、農業のけんきゅうにもとりいれるようになると、農業はいつそうすすんできました。

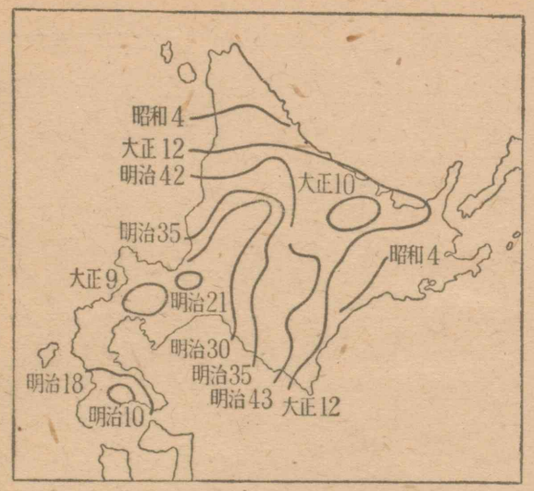
はじめのうちは、農家の人々も、つくつたものを、自分たちだけで使つたり、近くの町の人たちに賣つたりするだけでした

が、鉄道ができて、物を遠くまではこべるようになると、とかいの人々や、ほかの土地の人々のほしがるものをつくったほうが、おかねになることに氣がつきました。そこで、人々は、しだいに、高く賣れるものをたくさんつくるようになり、作物のしゅるいもだんだんふえていきました。

ことに、明治のはじめ、政府は、外國から、これまでになかったためずらしいやさいをとりいれて、人々につくることをすすめました。じゃがいも・たまねぎ・きゃべつ・とまと・すいかのようなものから、りんご・さくらんぼなどがだんだんつくられるようになったのは、このためでした。

このように、作物のしゅるいがふえてきたばかりでなく、同じ作物でもたくさんのしゅるいがつくられ、その土地によくあ

ったもの、今までよりもたくさんとれるものを、つくりだすようにくふうされました。たとえば、米なども、寒いところでもよくできて、たくさんとれるしゅるいのものをつくるのに、たいへん苦心をしました。そのおかげで、北海道や、東北の地方などでは、明治の世の中のおわりごろには、米がたいへんたくさんとれるようになりました。



米は、このように、だんだん寒い北の方までつくられるようになりました。

そして、このためには、農業のことをせんもんにけんきゅうするしけん場や、せんもんにべんきょうする学校がたてられたり、外國からすぐれたぎしをよん

で、しどうしてもらったことが、たいへん役にたったのです。

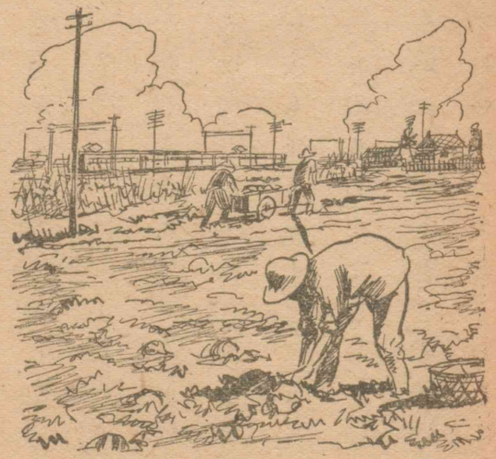
外國とのぼうえきがさかんになってから、かいこをかうことや、おちゃをつくることも、たいへんさかんになりました。そして、そのために、山や河原などがかいこんされて、くわの畑、ちゃの畑になっていきました。

山や河原につくられているちゃとくわの畑です。

しかし、そのはんたいに、外國から安く買えるようになったために、つくるひつようがなくなったものもありました。わたなどが、そうです。わたの畑は、しだいにくわやちゃの畑にかわっていきました。また、そめものの材料は、今までおもにあ

いからつくっていたのですが、そのかわりになる、もっとよい材料が外國で発見されたので、あいをつくることもなくなっていきました。

そのほか、大きな町に近い村などでは、町に住んでいる人々のほしがるやさいや、くだものや、草花をつくって賣るようになりました。



やさいや草ばなをつくっている畑

このように、作物のしゅるいもふえ、今まで以上に、たくさんとれるものが、くふうされるようになったので、農業もたいへんさかんになってきました。

新しく土地をかいこんして、田や畑をつくるということは、

明治になってからも、さかんにおこなわれました。なかでも、北海道では、アメリカのすすんだきかいを使う方法をとりいれたので、たいへん廣い土地がかいこんされました。

また、学問のけんきゅうがすすむにつれて、今まではどうすることもできなかった、ひでりや大雨のひがいをすくなくすることもできるようになりました。田へ水をひくべんりな方法も、考えだされました。そして、そのおかげで、田や畑も、だんだんとのっていきました。

北海道では、きかいを使って、農業をしていました。

しかし、日本は、たいへん山の多い國で、ひろびろとした野

原があまりありません。ですから、学問の力を利用しても、新しいりっぱな田や畑をたくさんつくっていくことは、なかなかむずかしいことでした。

人口がふえてくると、今までよりもっとたくさんの食料がいるようになります。そこで人々は、たとえば、同じ米でも、できるだけしゅうかくの多いしゅるいをつくりだそうと考えました。また、いねがそだちにくいと考えられていた土地でも、くふうをすればりっぱな米がとれるということに氣がつきました。しかし、それだけではじゅうぶんとはいえません。人々は、さらに、よいひりょうを使ってしゅうかくをふやすようにくふうをしていきました。そして、学問のすすんだおかげで、今までにないよいひりょうがつくられると、それを使って、二ばいも、

三ばいもの作物がとれるようになりました。

このように、いなかの人々は、いろいろと、くふうにくふうをかさねて、よい作物がたくさんとれるようにほねをおってきたのでした。しかし、そんなに熱心にくふうをしてみても、農家の人々のくらしのほうは、それほどよくはなっていきませんでした。

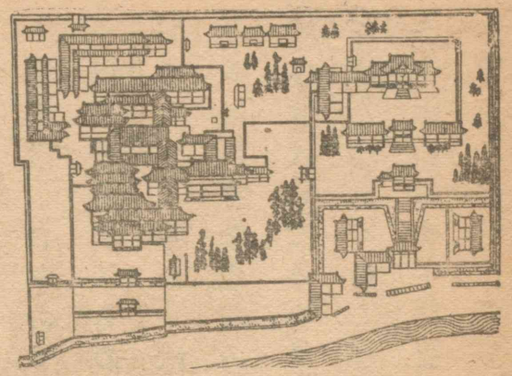
明治の世の中になると、田や畑も、自由に賣ったり、買ったりできるようになりましたが、そのために、商人や地主は、たくさんの土地を買いあつめることができました。そして、そのはんたいに、おかねにこまって、土地を賣り、ひとの土地をかりて、たがやさなくてはならない人々も、だんだんふえていきました。

これらの人々のなかには、くらしにこまって、町にはたらきにでたり、工場にはたらきにいったりしなければならなくなった人も、たくさんでてきました。

新しい学校

学校は、日本のずっとむかしにもありました、今から千二百年ほどまえに、そのころのみやこをはじめとして、國じゅうのおもなところに、はじめて学校がつくられました。しかしこの学校は、身分の高い人々のこどもたちだけがはいって、政府のやくにんになるために、べんきょうするところだったので、いっぱんの人々のこどもは、はいれませんでした。

武士の世の中になると、これらの学校は、みんななくなってしまったので、武士のこどもで、学問をしたいものは、おてら



これは、江戸にたてられた武士のための学校でした。昌平校（しょうへいこう）とよばれていました。左の上の方にあるたてものは、学生のねとまりするところ、その下にあるのは教室のようなものです。

などにいってべんきょうをしたものでした。

江戸にしょうぐんがいるようになると、そこに武士のためのの学校がたてられました。これは、今の大学のようなもので、おもに中國からつたわってきた学問をおしえていたのです。また、そのほかに、武士の世の中がおわりに近くなると、日本の古いしょもつをおしえる学校、西洋のことをべんきょうする学校、いしゃをつくる学校などが、江戸にもうけられました。

ほうぼうの大名たちも、このまねをして、じぶんのしろのある町に、けらいのこどもたちをいれる学校をつくりました。

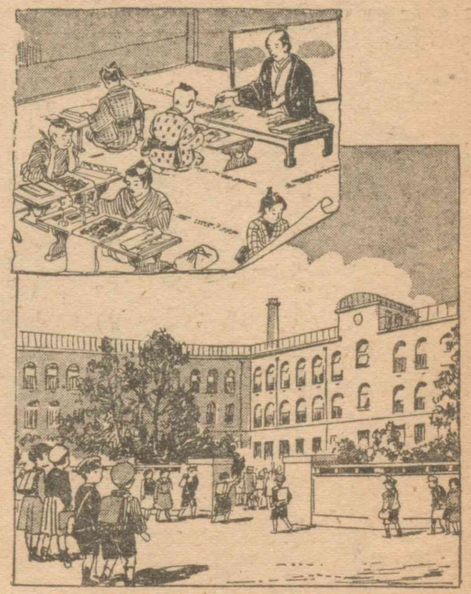
武士たちは、このようなじゅくで、学問をしました。

武士のこどもたちは、これらの学校にはいるか、学者などが自分の家でひらいている、じゅくというものにかよって、おもに、中國からつたわってきたむずかしい学問をべんきょうしたものでした。

武士でない人々のこどもたちで、べんきょうしたいものは、てらこやというものにかよいました。てらこやは、ぼうさん・かんぬし・いしゃ・ろうにんなどが、たいてい、じぶんの家のざしきなどを教室にして、おしえていたのですが、なかには、生徒が多いために、とくべつに学校の

ようなたてものをたてたところもあります。

ここでは、よみ・かき・そろばんといって、やさしい本をよむこと、しゅうじをすること、そろばんでかぞえることを、おもにべんきょうしました。そのなかでも、しゅうじは、てならいといって、いちばん力をいれたがっかでした。



むかしのてらこやと今の学校

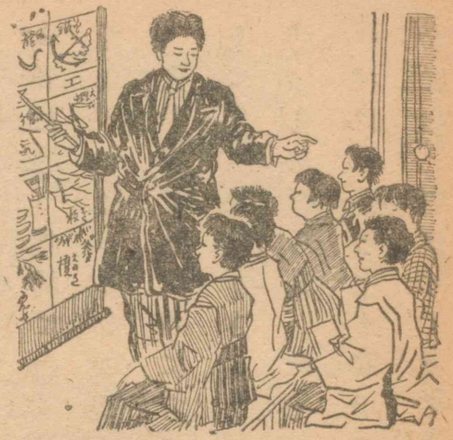
武士の世の中のおわりごろには、日本じゅうに、たくさんのてらこやができていきました。あなたがたの村や町には、てらこやにかよって、べんきょうしたことのあるとしよりが、まだ

いくにんかのこっていることでしょう。

しかし、今あなたがたのかよっているような学校ができたのは、明治の世の中になってからのことです。

明治になると、まず、東京に大学がつくられて、外國のすすんだ学問をべんきょうできるようになりました。そして、この大学には、学問にねっしんで、べんきょうのよくできる人なら、だれでもはいれることになりました。

大学ができたのにつづいて、日本じゅうに、たくさんの学校をつくるというきまりができました。これは、明治五年のことで、それから五、六年のうちには、日本じゅうのたいていの町や村に、今のような小学校ができました。そのころ、まだいなかには、西洋づくりのたてものなど、ほとんどないところへ、



明治の世の中のはじめのころの学校のありさまです。今の学校とくらべてみてごらんなさい。

大きなペンキぬりの学校がたてられたので、人々はたいそうおどろいたということです。

武士の世の中では、武士のこどもと、ふつうの人たちのこどもとは、べつなところにかよって、べんきょうしたのですが、この新しい学校へは、これまで、武士だった人たちのこどもも、いっぱんの人たちのこどもも、いっしょにはいって、つくえをならべて、べんきょうすることになりました。

また、新しい学校では、てらこやのように、よみ・かき・そろばんばかりでなく、外國からきたさんじゅつ、りか、たいそう、おんがくなどの新しいがっかのべんきょうができるようになりました。そしてしだいに、小学校ばかりでなく、中学校・女学校もできてきました。またこれらの学校ができると、その学校の先生をつくるためのしはん学校もできました。そして、日本の商業・工業・農業などが、さかんになるにつれて、商業学校・工業学校・農学校などもつぎつぎにつくられていきました。日本の人々の生活が、すすんでくればくるほど、学校のしゅるいもふえ、かずも多くなってきたのです。そして、学校にはいってべんきょうする生徒や学生のかずも、たいそう多くなりました。

このほか、目がみえない人、耳がきこえないために、ことばが話せない人などのためにも、とくべつの学校ができて、あな

たがたと同じように、べんきょうできるようになってきました。

このように、日本の学校は、明治になってから、きゅうにとどのってきました。まえにお話ししたように、明治の世の中になって、日本の工業・商業・農業がさかんになったのも、そのほか人々の生活がべんりになったのも、ひとつには、この新しい学校でまなんだたくさんの人々が、世の中にでてはたらいたからです。そのなかには、名まえが、世界じゅうの人々に知られているようなすぐれた人々もでてきました。

はじめて小学校ができたばかりのころは、なん年かん学校にかよわなくてはならないという、はっきりしたきまりはありませんでした。しかしそのうちに、四年かんだけは、どうしてもかよわなくてはならないという、きまりができました。けれど

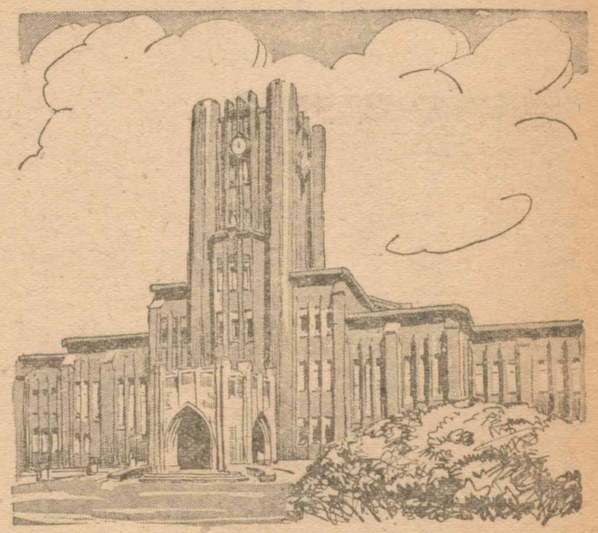
も、日本の生活がすすんでくると、これでもたりなくなってきます。そこで、六年かんはだれでもいかなくてはならないことになりました。

しかし、世界のすすんだ國々では、もっとまえから、たいていハ年ぐらいは、学校にいかなくてはならないという、きまりになっています。そこで、日本でも、昭和二十二年から、小学校の六年と中学校の三年は、だれもが、いかなくてはならないことになりました。

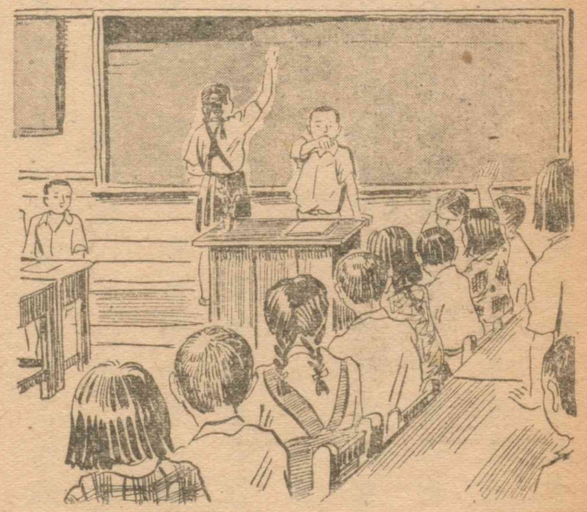
また、日本では、むかしから、女子はあまり学校にいかないというふうがありました。はじめて、小学校ができたころには、小学校にかよう女子は、男子の三分の一ぐらいしかありませんでした。女学校の生徒のかずも、男子の中学校の生徒のかずに

くらべると、ごくわずかなものでした。

しかし、そのうちに、だんだん世の中の人々も、女子も男子と同じように、べんきょうしなければならないことに、氣がつ



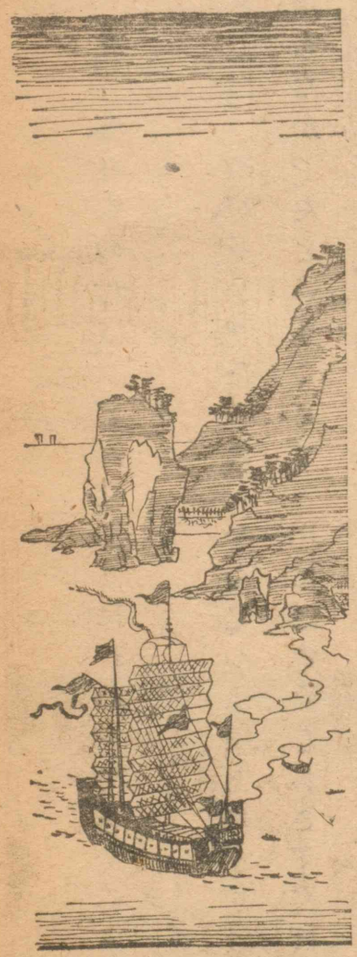
りっぱな大学のなか



男子も女子もいっしょにべんきょうしている中学校

いてきたので、小学校はもちろん、中等学校でも、女子の生徒のかずが、男子の生徒のかずとおなじぐらいにふえてきました。けれども、それより上の学校になると、やはり女子の学生は、ごくわずかしかいませんでした。

こんど新しい学校のきまりができて、女子も男子と同じように、高等学校へも、大学へもはいることができるようになりました。



五、私たちの村は、どんなふうにかわってきているか

ことしは、雨が多かったのに、かんじんの川上の方では、あまり降らなかったということで、川には電氣をおこすだけのじゅうぶんな水がなく、秋もなかばをすぎたころから、ときどきてい電がおこるようになりました。こんやも、夕ごはんがすんだあと、みんなで、うらの山からとってきたくりのみを、おいしそうにたべていると、ぱっと電とうがきえてしまいました。おかあさんが、すばやく、ランプの用意をしていらっしゃいます。

おじいさんが長いきせるですっているたばこの火だけが、ぼ

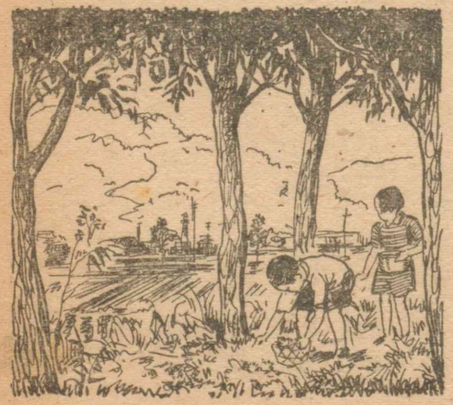
うっとあかるくみえます。廣くんとみちこさんは、つまずかないように、そおっとしょくたくをまわって、おじいさんのりょうわきにすわりました。

「おじいさん、ぼく、エジソンが電きゅうをつくったという話をよみましたが、この村には、いつごろから電とうがともったのですか。」

廣くんが、くらやみのなかで、おじいさんにききました。

「うん、電とうかね。電とうがついたのは、たいしてむかしのことではないよ。」

おじいさんは、ちょうどこのとき、おかあさんのともしたランプの光で、きせ



るにたばこをつめながら、お答えになりました。

「考えてみると、ランプの光も、なかなかなつかしいものだ。おじいさんがおまえたちぐらいのころには、このへんでは、こんなにくらいランプしかなかったのだからね。それが、だんだんべんりになってきて、どうとう電とうがつくようになった。この村に、はじめて電とうがともったのは、たしか三十年ぐらいまえのことだろうね。役場のげんかんにともるというので、みんなおしかけていってけんぶつしたものだったよ。この家についたのは、いつごろだったろうねえ、おとうさん。」

「私が十二、三のときだから、二十五、六年まえになりますね。」

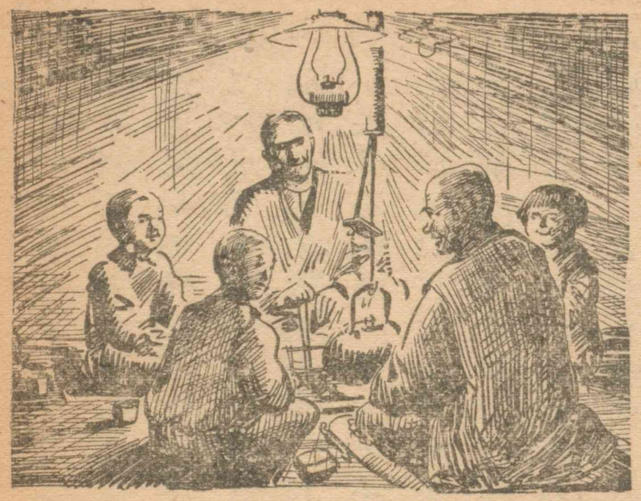
おとうさんは、どまのくらがりで、なにかしごとをしていら

っしゃるようです。

「おしろの町に、汽車が通るようになったのは、いつごろですか。」

こんどは、みちこさんがしつもんしました

「そうだ。あれは、おじいさんが十七、八のときだ。だから、もう五十年以上まえになるだろう。いよいよ汽車が通るという日には、村の人が、朝からべんとうをもって、ぞろぞろけんぶつにでかけたものだ。汽車といっても、そのときの



は、今のにくらべると、かたちも小さいし、たいして早くもなかったものだが、なにしろそのときには、みんなたいへんおどろいたものだよ。なん時間もなん時間もまったあげくに、まっくろいけむりをはく汽車がいさましく走るのをみたときには、みんな思わず、ばんざいをさけんだね。汽車にのっていた人たちも、まどからはたをふっていた。あのときのきもちは、ちょっとわすれられないなあ。」

「汽車が通るようになってから、村の人たちの生活は、どんどんべんりになってきたのでしょう。」

「いっそくとびに今のようになったのではないが、だんだんべんりになったことはたしかだね。」

「おじいさん、どんなところがべんりになったのですか。くわ

しく話してください。」

廣くんは、なかなかねっしんです。

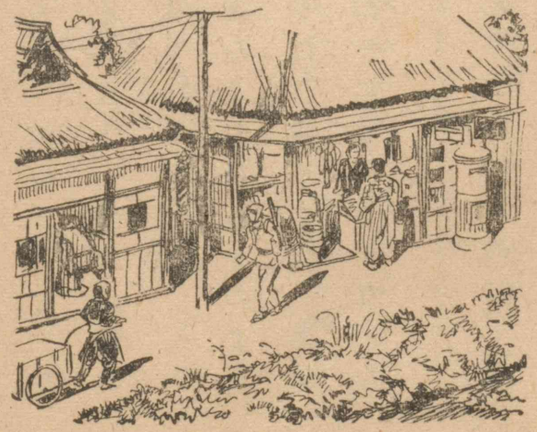
「いや、そういわれても、ちょっとこまるね。べんりになったところは、かぞえきれないほどたくさんあるよ。まあ、氣のついたことから、すこしずつ話してみよう。」

このとき、きゅうに電とうがついて、あたりはひるまのようにあかるくなりました。みちこさんは、「やはり電とうは、あかるくてよい。」と思いました。おじいさんは、にこにこしながら、話をつづけていらっしゃいます。

「汽車が通るようになって、いちばんべんりになったのは、遠くの土地とゆききすることだろう。鉄道のおかげで、どれだけてがるに旅ができるようになったかわからない。それに、

駅のある町までてるのにも、馬車がどんどん走るようになったし、道路もよくなってきたし、たいへんらくになったものだ。ブーブーふえをふきながら走っていく馬車なんかは、廣やみちこに、ぜひみせたい氣がするね。

ところで、遠くのとかいとのゆききがらくになってくると、いろいろべんりなものが、たくさんはいってくるようになる。ことに、外國でつくった品物は、はくらいといって、たいへんめずらしがったものだ。こんなふうだから、村にも、ぽつぽつとお店ができるようになってきた。役場のあたりは、そのころ

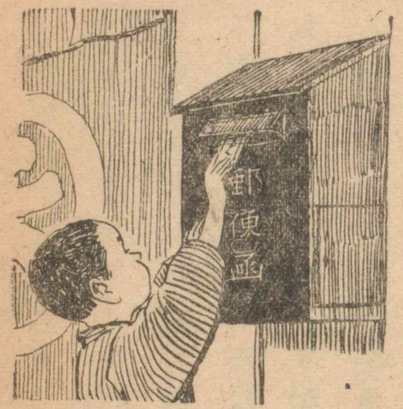


から、村では、いちばん家のこみあったところだったね。

「役場のとなりに、ゆうびんきょくができたのも、だいぶまえのことになりますねえ。」

おとうさんが、よこから口をいれました。

「いや、ゆうびんきょくは、たいして古くないだろう。むかしはあすこに、葉書(はがき)や切手(きって)を賣る店があって、のきしたに、赤いはこのポストがぶらさがっていたものだ。おしろの町には、ずっとむかしから、ちゃんとしたゆうびんきょくがあったが、これは、鉄道が通るまえからだよ。電ぼうがうってるようになったのは、だいぶんあとのこ



むかしのポスト

とだがね。なにしろ、汽車が通ってからは、手紙なども、ずっと早くとどくようになったのは、大だすかりだった。」

このとき、おかってから、おかあさんの声がしました。

「みちこさん、あしたは、しんたいけんさがある日でしょう。おゆがわいていますから、早くおふろにはいりなさい。」

みちこさんは、おかあさんにへんじをすると、おじいさんにちょっとことわって、だいどころの方にとんでいきました。

「この夏には、みんなチブスのよぼうちゅうしゃをしましたが、おじいさんのちいさいころにも、あんなちゅうしゃがあったのですか。」

「いやいや、よぼうちゅうしゃなどというものは、ついさいきんできたものだ。この村など、おじいさんのこどものころは、

おいしゃさんがひとりもいなかったから、くすり賣りから買ったくすりでまにあわないような病氣になると、はるばる町のびょういんまでいかなくてはならなかったくらいだ。

おじいさんの、またおじいさんが生きていらっしゃったころに、たいへんわるい病氣がはやったことがあるそうだが、そのときも、おいしゃさんはいないし、とうとう村の人たちが半分以上、その病氣にかかって、ずいぶん死んだ人もでたという話だ。むかしは、でんせん病のことを、えき病といったのだが、これがはやりだすと、わけがわからないので、ただおいのりばかりして、さいなんをのがれようと考えたものらしい。だから、今のようにゆきとどいたてあてをすればよくなるものも、どんどんおもくなるばかりだったのだ。」

「廣のむしばも、早くてあてをしないといけないね。」
おとうさんが、ちゅういをなさいました。廣くんは、二、三にちまえから、すこしはがいたむのです。
「おいしゃさんがいれば、病氣をしても、安心していられる。しかし、てあてをしてもよくならぬものもあるし、病氣にならないにこしたことはないだろう。おいしゃさんやほけんじょにも、病氣になってからごやっかいになるだけではなくて、ふだんからときどき、みていただく心がけがだいじだよ。いなかは、とかいより空氣がよくて、むねの病氣などはすくないというこ

村のほけんじょ

とだったが、氣をつけない人が多いので、このごろはだいぶふえたという話だ。それに、かいちゅうなんかは、きっと町の人より多いだろう。廣のむしばも、はやくなおさないと、氣がつかないうちに、からだにこしょうができてくるよ。おじいさんも、わかいころに、もっとはをだいじにしておけばよかったと思っている。なにしろ、そのころは、はがわるいといっても、おしろの町にだって、まだはいしゃさんはなかったのだからね。」
おとうさんは、さっきから、電とうの下で、しきりにかきつけをみていらっしゃいます。おじいさんが、ちょっとせきを立たれたので、みちこさんは、こんどは、おとうさんにしつもんをはじめました。

「おとうさん、それはなにのかきつけなの。」
「これはね、土地をうりかいするやくそくのかきつけだよ。」
おとうさんは、にっこりわらって、たばこの火をつけながら、せつめいしてくださいました。
「さいきん、新しいほうりつができたので、今までかりて、たがやしていた土地は、買って自分の土地にすることができるようになったのだよ。川むこうの山の畑は、むかしから、よくせわをした土地だから、まえから、ほしいほしいと思っていたが、とうとうおとうさんの土地になった。これからは、ひとりでたくさんの土地をもつ人もなくなるし、自分は町にいて、いなかに田やはたけをもっているという人もなくなるわけだ。」

「村の人が、みんな自分の土地をもつんですね。」
「そうだ。だから、しんけんにはたらいてさえいれば、だんだんよいくらしができるようになるだろう。今までは、どんなにはたらいても、すこしもくらしがらくにならなかったのだからね。おとうさんがわかいころには、この村の人たちも、くらしにこまって、ほかの土地にはたらきにいったり、なかには、とうとう村をはなれてしまったりする人も、ずいぶんあった。とかいの工場にはたらきにでた人のうちには、病氣になって、帰ってきた人も多かったようだ。そのころにくらべると、村のくらしも、ずいぶんらくになってきたものだ。」
「せんそうのあいだは、人でがなくて、ずいぶんこまりましたよ。」

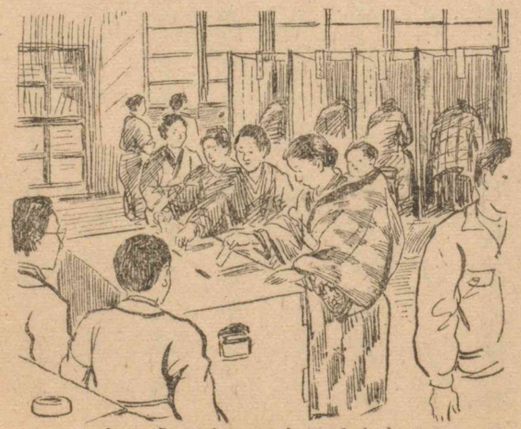
そのとき、ちょうどおかってのしごとをすませて、おへやにはいってこられたおかあさんが、おっしゃいました。

「おとうさんがせんそうから帰るまで、おかあさんはたいへんだったなあ。しかし、せんそうでは、もっともっときのどくな、ふしあわせな人が、村にもたくさんできたねえ。」

「おとうさん、話はちがいますが、きょういくいいんのせんきよというのはなんですか。学校のまえに、ポスターがありました。」

廣くんが、とつぜん、おとうさんにたずねました。

「きょういくいいんのせんきよかね。あれは、この縣で、よくものわかったりっぱな人を七人えらんで、その人たちにきょういくのやりかたをよく考えてもらおうというのだ。だから、とてもたいせつなせんきよだよ。せんきよは、今までにもたびたびあったから、もうようすがわかっているだろうが、せんそうのあとになってやっと、女の人も男の人と同じように、せんきよのしかくができたのだ。女の人だって、きょういくいいんにでも、國会ぎいんにでも、なんにでもなれるんだ。むかしにくらべると、すっかりかわったねえ。村長さんを、村の人みんなのせんきよでえらぶようになったのも、ついさいきんのことで、それまでは、村会の人だけできめていたのだから。」



きょういくいいんのせんきよ

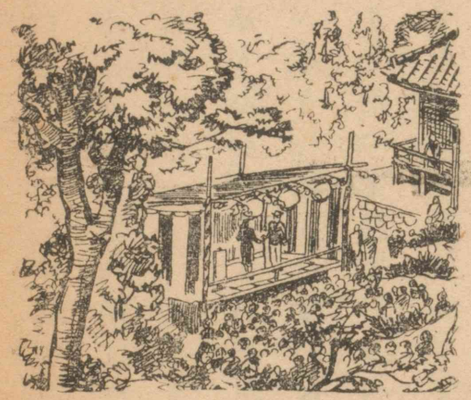
「でも、そんなにたいせつなせんきょのしかくをもっていながら、どうひょうにいかなかったり、自分でよく考えずに、人のいうとおりにとうひょうしたりする人があるのは、おしいことです。」

おかあさんは、ほんとうにざんねんそうにおっしゃいます。

そのとき、おじいさんが、へやにもどっていらっしゃったので、話はまた、むかしばなしになりました。

「このあいだ、旅行をしたとき、色のついたえいがをみたが、たいしたものができる世の中になったな。そうそう、テレビジョンとかいうものも、きっと近いうちに、どんどん使われるようになるにちがいない。むかしにくらべると、ずいぶんたのしみもふえたものだよ。

おじいさんのわかかったころには、えいがもなければ、ラジオもない。こんなへんぴな村には、旅のしばいもやってはこないし、せいぜい、年に一かいのおまつりに、みんなでおどったりするくらいが、たのしみだったよ。それでも、ときどき町までいけるようになってからは、町のお店でほしい物を買ったり、ちょっとしばいごやにはいったりすることもできるようになったがね。今は、バスにさえのれば、かんたんに町までいけるし、また町なんかにでかけなくても、やきゅうをやったり、学校でえいがをみたり、てがるにたのしめるからべんりになったよ。」



「おじいさん、べんりだべんりだというけれど、きょねんの冬みたいに、てい電ばかりだと、かえってふべんじゃないかしら。」

廣くんが、そういったので、みんなわらいだしました。おとうさんも、わらいながら、

「そうだ。まだまだふべんなことが多いね。大水がでるとこまるし、そうかといって、だいじなときに雨が降らなくてもこまる。つゆのころに、まえの川があふれだして、土手がきれそうになったときには、みんなあわてたなあ。どんなに雨が降っても、あんな心配をしないですむように、まえから用意しておかなければいけないのだ。大水ばかりじゃない。ちょっと村の生活をながめてみても、よくしなければいけないと

ころが、たくさんあるからね。」

とおっしゃいます。

「家のたてかたなんかも、むかしのままで、ふべんなところが多いでしょう。くらいへやがたくさんあるし!」

おかあさんも、なかなかいけんをもっていらっしゃるようです。

「たべものだって、もっと考えたほうがいいって、ラジオでいっていたわ。」

みちこさんも、まけずにいいます。廣くんは、エジソンの発明の話を思いだしました。

くらいへやの多いいなかの家。このような家をみて、どんなことを考えますか。

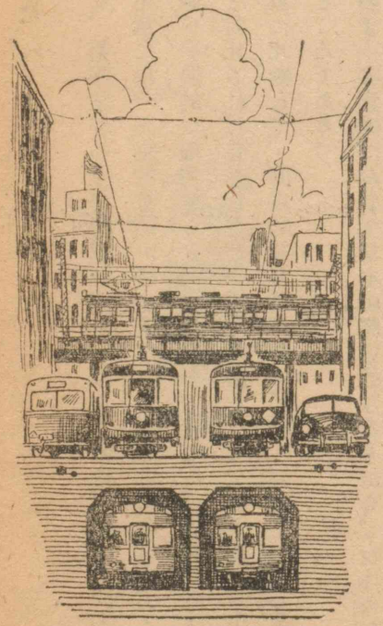
「エジソンみたいに、大発明をやれば、きっとみんなの生活がよくなるよ。」

「うん。そのとおりだ。みんなが、どうしたらもっとうまくいくだろうと、いつもくふうをするようにすれば、きっとよい生活ができるようになる。だが、それだけでは、まだたりないね。みんながよく力をあわせて、助けあわなくてはだめだ。一けんの家でも、みんながきもちよく、力をあわせていなければ、きっと失敗する。

いなかでは、まだ古いしきたりがつよくて、ほかの土地からきた人をのけものにしたり、むやみに人の家のうわさをしてみたり、今までそうしたからというので、むだなかねを使ってみたり、まだ男が女にいばっているし、わけのわからな

いめいしんを信じている人もあるし、いろいろなおさなければならないところがある。こういうことを、みんなで力をあわせてよくしていかないなら、どの人もみんな幸福になるというような日は、なかなかこないだろう。」

おとうさんのお話がとぎれると、庭でなく虫の声が、いちだんとよくきこえてきます。



教師のかたがたへ

こんど出された社会科指導要領補説に、第四学年の主要経験領域が「私たちの生活の現在と過去」と示されているように、この期の児童には、歴史的意識が芽ばえてくる。もちろん、このことは、明確な時代の観念に基づいて、事象を発展的に理解するということを、ただちに意味してはいない。児童に把握される過去は、現在と対比された昔として、一様に理解されるという程度を出ないであろう。ともあれ、三年までの児童に比較して、歴史的なものへの「関心」が高まってきていることは、われわれの多くが経験するところである。

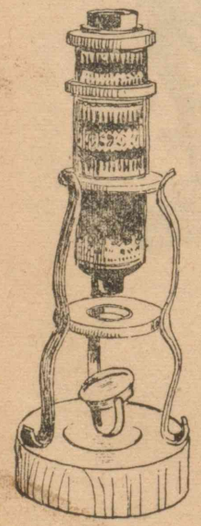
この書「日本のむかしと今」は、このような意味において日本の歴史的なことがら、われわれの祖先の生活に取材し、生産・消費・交通・通信・政治・教育その他、社会生活における主要なことがらが、昔にくらべてどのように便利に豊かになってきたかということを理解させ、現在の人間生活・社会生活に対する目をひらき、これについての知識や、理解を広め、かつ高めることを主要なねらいとしたのである。

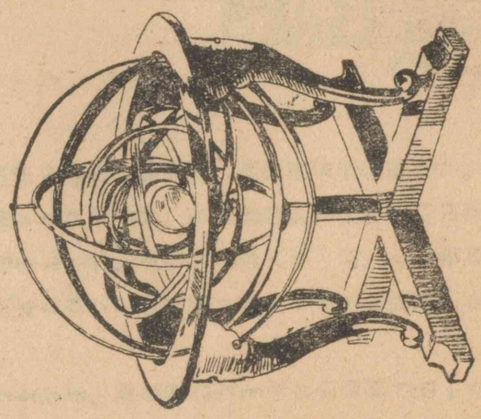
一般に、社会科の学習指導では、歴史的なものの取り扱いかたが、とかく無理強いや暗記に終るという傾向がつよい。そのため、この書では、なるべく児童の直接的な、あるいは間接的な経験に訴えることによって、理解が広められ、また学習活動の手がかりが　與えられるように注意したつもりである。

もちろん、このねらいは、かならずしも十分にはたされたとはいえないかもしれない。したがって、教師はこの点に留意して、実際にあたっては、できうる限りさし絵その他の材料をおぎない、児童の経験に訴えて、指導に効果のあるよう努めていただきたいと思う。

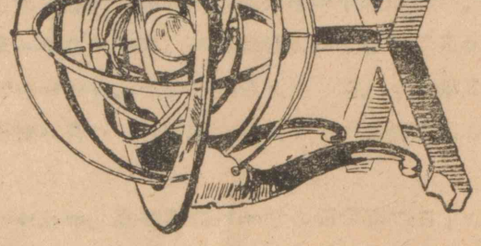
ここにことわるまでもなく、この書は、従來のいわゆる教科書でもなく、まして、歴史の教科書という性格のものでもない。あくまでも、歴史的なことがらに取材した一つの参考書として取り扱っていくべきものである。

また、この書と三年用として配本された「大むかしの人々」との関係についていえば、「大むかしの人々」のあとがきでものべてあるように、「大むかしの人々」は、この書の序説ともいうべきものであるから、この書の内容を理解するためには、その書の内容が、大いに役立つと考えられる。実際の指導にあたっては、子供の理解の程度に應じて、適宜両書を融通して、使用するように配慮していただきたいと思う。





1500	世		
	1543		ヨーロッパのポルトガル人が、日本にはじめてきた。 キリスト教がつたわる。 みだれた世の中を、信長、秀吉がしずめて、おさめていた。
	の		
1600	1603		徳川家康が、江戸に政治の中心をおいて、世の中をおさめるようになった。
		1639	外國とのゆききがとめられた。
	中		
1700		江戸時代	
1800			
		1853	アメリカ人ペリーが、四そうの船をひきいて日本にきた。
	1868	明治	みやこが東京にうつされて、外國と自由にゆききできる新しい世の中となった。
1900	新しい世の中	大正	
		昭和	



日本のむかしのおもなできごと

-500

538 佛教が、大陸からつたわる。

-600

607 中國にはじめて、國から使いがだされた。

-700

710 奈良にりっぱなみやこがつくられた。

-800

794 京都へみやこがうつされた。

-900

894 中國へ、國の使いを送ることをやめた。

-1000

-1100

さむらいのいきおいが、だんだん強くなってきた。

-1200

1192 源頼朝が、鎌倉に政治の中心をおき、世の中をおさめていくようになった。

武士の世

-1300

京都に政治の中心がうつされた。

-1400

世の中がみだれて、大名たちがあらそいあった。

-1500

1543 ヨーロッパのポルトガル人が、日本にはじめてきた。

700	710		奈良にりっぱなみやこがつくられた。
800	794		京都へみやこがうつされた。
900	894		中國へ、國の使いを送ることをやめた。
1000			
1100			さむらいのいきおいが、だんだん強くなってきた。
1200	1192		源頼朝(みなもとよりとも)が、鎌倉(かまくら)に政治の中心をおき、世の中をおさめていくようになった。
1300	武士の世		京都に政治の中心がうつされた。
1400			世の中がみだれて、大名たちがあらそいあった。
1500			
	1543		ヨーロッパのポルトガル人が、日本にはじめてきた。 キリスト教がつたわる。 みだれた世の中を、信長、秀吉がしずめて、おさめていた。
1600	の中 1603	江戸時代 1639	徳川家康が、江戸に政治の中心をおいて、世の中をおさめるようになった。 外國とのゆききがとめられた。
1700			
1800		1853	アメリカ人ペリーが、四そうの船をひきいて日本にきた。
1900	1868 新しい世の中	明治 大正 昭和	みやこが東京にうつされて、外國と自由にゆききできる新しい世の中となった。

社会科　第四学年用
日本のむかしと今
Approved by Ministry of Education
(Date Jan. 22, 1949)

昭和二十三年十二月二十五日　翻刻発行
昭和二十四年　二月　十　日　修正翻刻印刷
昭和二十四年　二　月二十五日　修正翻刻発行
（昭和二十四年二月二十五日　文部省検査済）　定價　金弐拾九円七拾銭

著作権所有　文部省

翻刻発行兼印刷者　東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社
代表者　長得一
印刷所　東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社堀船工場
発行所　東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社

四年
赤坂史郎